

小塚遺跡

—個人住宅建設に伴う埋蔵文化財第5次発掘調査報告書—

1995

静岡県芝川町教育委員会

小塚遺跡

—個人住宅建設に伴う埋蔵文化財第5次発掘調査報告書—

1995

静岡県芝川町教育委員会

序

芝川町には、全域にわたり数々の遺跡が散在しています。

甲斐より南流する富士川の東岸段丘の楠金に南原遺跡があり、その内容は、昭和4年発刊の『静岡県史』第1巻に収録されて、早くからその存在と価値を認められています。

近年、南原遺跡には露呈している土器の破片や打製石斧・石鏃・黒耀石片などを収集する児童・生徒や考古学を志す方々の姿が目立ち、縄文時代によせる期待と夢のメッカになっています。

また、昭和59年に、静岡県埋蔵文化財調査研究所による本格的調査が行われ、縄文時代中期の住居址が発見されました。

このようにして、芝川町各地域の遺跡の内容は徐々に明らかになりつつあります。

小塚遺跡は、昭和46年の第1次調査に始まり、4次にわたる調査と発掘を重ね、先土器時代の遺跡として高い評価を受けています。

昨年は、小塚遺跡内に個人住宅の建設が予定され、急きょ教育委員会の手による工事予定地の発掘調査が行われました。調査主任に加藤学園考古学研究所の秋本眞澄氏をお願いし、強力なスタッフを得て、8月の炎天の下で発掘作業が行われました。

その結果、縄文時代の集石土壙6基と焼土2ヵ所が発見され、同時代の土器片や石器類も多く出土しました。また、先土器時代の剝片や石核なども少量ではあったが検出され、先人の足跡を改めて知ることができました。

こうした調査は、今後も継続し、芝川町文化の源流をさぐると共に、文化財保護に努めてまいりたいと思っております。また、町民の皆様の誇りにしていただければ、幸甚に存じます。

平成7年3月

芝川町教育長 佐野恒美

例 言

1. 本書は富士郡芝川町西山字小塚1858-4に於ける個人住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は、平成6年4月14日から同年4月15日まで確認調査を行い、それに基づいて平成6年8月1日から同年9月8日まで本調査を実施した。調査対象面積は299㎡で、確認調査は10㎡、本調査は299㎡であった。
3. 調査は、芝川町教育委員会が調査主体となり、静岡県教育委員会文化課が調査指導を行い、加藤学園考古学研究所が調査を担当した。
4. 調査体制は、次の通りである。

調査主体	芝川町教育委員会	教育長	佐野 恒美
調査指導機関	静岡県教育委員会	文化課長	鈴木 吉勝
(担当)	同	指導主事	関野 哲夫)
調査担当	加藤学園考古学研究所		秋本 眞澄
事務局	芝川町教育委員会	事務局長	朝比奈幹雄
		B&G海洋センター	所長 白井 芳郎
		同	社会教育主事 稲葉 英二

5. 資料整理は、沼津市大岡自由ヶ丘1979の加藤学園考古学研究所にて実施した。
6. 資料整理にあたっては、加藤学園考古学研究所の秋本が指導に当たり、出土遺物の洗浄・注記は同研究所員の高村律子、測図・トレース・拓本は秋本が当たり、鳥海嘉奈子が補佐した。
7. 本書の執筆及び図版作成は、秋本がこれに当たった。
8. 発掘調査参加者は、次の通りである。
小野眞一・佐藤亜希子・鳥海嘉奈子・笠井初枝・服部孝信・佐野安朗・佐野晴美・冠城信子
9. 発掘調査に係る遺物・図面・記録写真等は、芝川町教育委員会にて保管している。

目 次

序

例 言

第1章 序 説	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第1節 遺跡の位置と地理的環境	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 調査の経過	4
第1節 調査に至る経緯と確認調査	4
第2節 調査の経過	4
第4章 遺跡の内容	9
第1節 第5次調査地点と土層	9
第2節 遺 構	11
第5章 出土遺物	17
第1節 土 器	18
第2節 石 器	32
第6章 考 察	40
第7章 結 語	41

挿 図 目 次

第1図 小塚遺跡の位置と周辺の遺跡	2
第2図 調査位置図(第1次～第5次調査)	5
第3図 第5次調査風景	7
第4図 第5次調査の新聞記事	8
第5図 土層柱状図(第1次～第5次調査)	9
第6図 土層断面実測図	10
第7図 遺構関連図	11
第8図 第1集石土壌実測図	12
第9図 第2集石土壌実測図	13
第10図 第3集石土壌実測図	13
第11図 第4集石土壌実測図	14
第12図 第5集石土壌実測図	14
第13図 第6集石土壌実測図	15

第14図	第1焼土実測図	15
第15図	第2焼土実測図	16
第16図	出土遺物分布図	17
第17図	出土土器拓影図(1)	20
第18図	出土土器拓影図(2)	21
第19図	出土土器拓影図(3)	22
第20図	出土土器拓影図(4)	25
第21図	出土土器拓影図(5)	26
第22図	出土土器拓影図(6)	27
第23図	出土土器拓影図(7)	28
第24図	出土土器拓影図(8)	29
第25図	出土土器拓影図(9)	30
第26図	出土土器拓影図(10)	31
第27図	出土石器実測図(1)	35
第28図	出土石器実測図(2)	36
第29図	出土石器実測図(3)	38
第30図	出土石器実測図(4)	39

図 版 目 次

図版1	調査終了時の状態	図版6	遺 構【4】
上	第5層（縄文時代遺物包含層）までの状態	上	第3集石土壇
下	第6層以下の試掘の状態	下	第3集石土壇（完掘時）
図版2	土 層	図版7	遺 構【5】
上	第1トレンチ1区西壁	上	第4集石土壇
下	第2トレンチ2区北壁	下	第4集石土壇（完掘時）
図版3	遺 構【1】	図版8	遺 構【6】
上	第1集石土壇	上	第5集石土壇
下	第1集石土壇（完掘時）	下	第5集石土壇（完掘時）
図版4	遺 構【2】	図版9	遺 構【7】
上	第2集石土壇	上	第6集石土壇
下	第2集石土壇（完掘時）	下	第6集石土壇（完掘時）
図版5	遺 構【3】	図版10	遺物の出土状態【1】
上	第1・第2集石土壇	図版11	遺物の出土状態【2】
下	第1・第2集石土壇（完掘時）	図版12	遺物の出土状態【3】

第1章 序 説

富士川流域に沿う芝川町は、比較的遺跡に恵まれた所である。富士川が町を横断し、それに流れ込む小さな支流が4本あり、その支流が形成した僅かな低地を除き、残りの殆どが山地・台地になっている。そのため小規模の遺跡が主体である。また、その大半は縄文時代のものである。

芝川町の考古学的研究が進んだのは、戦後のことである。現在の芝川町に合併する以前は、芝富・柚野・内房の三ヵ村で、この頃知られる遺跡として、昭和4年発刊の『静岡県史』第1巻に芝富村の楠金で、ほぼ完全な鉢形土器と石鏃・打製石斧・磨製石斧・石匙、小学校付近では石鏃、大久保では石棒が出土したことが記載されている。また、柚野村では猫沢から厚手の壺形土器と石棒の破片、上柚野のカミヤ沢から石棒、下柚野の辻からは縄文土器及び黒耀石片、オマゴメからは有頭石棒の出土が見られる。内房村については、『静岡県史』第2巻に打製の石槍が出土したことが報告されている。このように合併して芝川町となる以前から遺跡の存在が知られていた。

この地域の考古学的研究が体系的に進展したのは、昭和27・28年頃からの中野國雄氏の踏査以後である。同氏は『吉原市史研究資料』第2号において富士地区（旧富士郡）の遺跡地名表を掲載し、その中に芝川町の遺跡と出土遺物が紹介されている。次いで33年には小野眞一氏が西山・大久保付近を踏査され、西山の小塚遺跡、大久保の向ヶ谷戸遺跡などを発見されている。翌34年には佐藤民雄・中野國雄・小野眞一の三氏によって芝川流域の踏査がなされ、上柚野の中才遺跡をはじめ下柚野の東原Ⅰ遺跡・同Ⅱ遺跡などが発見された。また、これと前後して中野國雄氏により大久保の大明神・若宮、羽鮒の羽行平・坂本・上羽鮒、長貫の砂原・南原・宮ヶ谷戸などの諸遺跡が次々と発見された。また、内房においても、稲垣甲子男氏によって本城寺・大嵐などの遺跡が発見された。

昭和43年以後になると、地元の唐紙一修・佐野文孝両氏による踏査が始まり、翌44年には小野眞一氏を二度にわたって迎え、芝川町内の諸遺跡の踏査がおこなわれた。その後も活動は続き、天神遺跡などが発見され、昭和45年に『駿豆考古』第9号に「富士郡芝川町の遺跡」と題して、芝川町の遺跡を発表している。

本格的な発掘調査が行われたのは、昭和46年の小塚遺跡（第1次調査）であった。農免道路建設に伴うもので、路線内という極めて限られた部分であったため、遺跡の中央部の一部を発掘したに過ぎなかった。調査の結果、縄文時代早期・前期の土器や石器とその下層より先土器時代のナイフ形石器や尖頭器・石核・剝片などが出土し、予想外の成果をおさめた。とりわけ、出土した石核の中に舟底形石核があり、静岡県内では初見のものであった。その後、昭和56年にも第1次調査の北隣の部分で、小塚遺跡の第2次調査が行われた。工場用地としての開発予定地の調査であり、調査の結果、縄文時代早期の土器や石器が少量出土した。昭和59年には県埋蔵文化財調査研究所による南原遺跡の調査が実施され、縄文時代中期の住居址が発見された。平成5年になると再び小塚遺跡で、倉庫建設に伴う第3次調査が行われ、縄文時代前期の住居址2軒と早期と思われる陥穴1基、草創期の石器製造址1ヶ所が発見され、草創期の細隆線文土器も出土した。この後も引き続いて町道整備に伴う第4次調査が行われた。このように近年、遺跡の内容が次第に明らかになりつつある。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の位置と地理的環境

小塚遺跡は、静岡県富士郡芝川町西山字小塚にあり、身延線芝川駅から芝富橋を渡って芝川沿いに、県道芝川－上井出線を北方へ約3km行き、そこより農免道路西山－稗久保線を約1km登っ



第1図 小塚遺跡の位置と周辺の遺跡

(1. 小森遺跡、2. 久保遺跡、3. 踊場A遺跡、4. 踊場B遺跡、5. 小塚A遺跡、6. 小塚B遺跡、7. 下条下垣戸遺跡、8. 東久保遺跡、9. 向ヶ谷戸遺跡、10. 大明神A遺跡、11. 大明神B遺跡、12. 羽行遺跡、13. 坂本遺跡、14. 平野遺跡、15. 宮ヶ谷戸遺跡、16. 南原遺跡、17. 橋場遺跡)

た標高200m前後の羽鮒丘陵の一端の平坦部に位置している。この羽鮒丘陵は三つの川に挟まれ、その強い影響を受けている。東側は安居山断層崖として、潤井川の谷及び星山丘陵に向かって約30度の急傾斜となっており、西側へは10度内外の緩傾斜をもって芝川の谷や西山河岸段丘へ下っている。南側は富士川を越して松野方面へ伸びているが、富士川により途中で切断されている。北側へは、細長く伸び、富士宮市上野の上条付近で新富士の熔岩流の下に埋没してしまい、それ以北は点々と島状に現れている。この羽鮒丘陵の西側の緩斜面の一端に遺跡は位置している。遺跡の周辺はかつては野菜畑や雑木林に覆われていたが、現在では荒地と雑木林と化しており、遺跡の上方では開発が行われて、住宅や工場が建ち並んでいる。

第2節 歴史的環境

芝川流域における小塚遺跡周辺の遺跡を見ると、先土器時代の遺跡として西山の小森遺跡（第1図1）があり、ナイフ形石器・尖頭器が採集され、縄文時代草創期に属する有舌尖頭器なども見られる（注1）。縄文時代の遺跡として、西山においては、後期の称名寺併行と思われる土器が採集された久保遺跡（第1図2）や、厚手の土器が採集されている踊場A遺跡（第1図3）・踊場A遺跡と同様な土器と石鏃が採集された踊場B遺跡（第1図4）・小塚遺跡とほぼ同様な早・前期の土器や石鏃が採集された小塚B遺跡（第1図6）・早期の茅山式と思われる土器が採集された下条下垣戸遺跡（第1図7）がある。大久保においては、後期と思われる硬質薄手の土器が採集された東久保遺跡（第1図8）・中期の勝坂式や加曾利E式土器と打製石斧・石錘などが採集された向ヶ谷戸遺跡（第1図9）・中期の柏窪式や加曾利E式土器が採集された大明神A遺跡（第1図10）・早期末と後期と思われる土器が採集され、若宮遺跡とも呼ばれる大明神B遺跡（第1図11）がある。羽鮒においては、打製石斧が採集された羽行遺跡（第1図12）や中期の柏窪式に類似する土器や加曾利E式土器及び打製石斧・石錘などが採集され、羽鮒遺跡とも呼ばれる坂本遺跡（第1図13）・早期と中期の土器が採集された平野遺跡（第1図14）などの諸遺跡が知られている。また、富士川流域の長貫においては、中期の加曾利E式土器と打製石斧・石鏃・磨石・石皿などが採集された宮ヶ谷戸遺跡（第1図15）・古くから多量の中期の土器や打製石斧・石匙などの石器類を出土している南原遺跡（第1図16）・打製石斧や土器が採集された橋場遺跡（第1図17）などがあげられる（注2）。発掘調査が行われたのは、小塚遺跡の他には南原遺跡だけで、昭和59年に静岡県埋蔵文化財調査研究所が調査を行っている。その結果、縄文時代中期から後期の遺跡として確認され、住居址や配石遺構・土壙などが発見された。縄文時代以降の遺跡としては、下柚野の辻遺跡において、縄文時代中期の勝坂式や加曾利E式の土器と後期の堀之内式土器及び打製石斧・磨製石斧などと共に、弥生時代中期の壺形土器や甕形土器と後期の台付甕形土器や、古墳時代の土師器と須恵器が出土している（注3）。その後の遺跡は現在のところ未発見である。以上のように、芝川流域において、先土器時代から古墳時代に至る遺跡が発見されており、特に縄文時代の遺跡が多い。

注1. 秋本真澄「駿豆地方における先土器時代遺物」『駿河小塚』 1972年。

2. 唐紙一修・佐野文孝「富士郡芝川町の遺跡」『駿豆考古』第9号 1970年。

唐紙一修・佐野文孝「周辺の遺跡」『駿河小塚』 1972年。

3. 注2に同じ。

第3章 調査の経過

第1節 調査に至る経緯と確認調査

平成5年6月、芝川町西山字小塚1858-4に個人住宅建設計画があることを、土地所有者から町教育委員会に埋蔵文化財の有無についての照会がなされた。町教育委員会は、県文化課へ対応を協議すると共に、土地所有者へ周知の遺跡内であり、埋蔵文化財の調査が必要であることを回答した。

平成6年1月、遺跡の範囲確認の調査を実施するための協議が、土地所有者・町教育委員会・県文化課の間で行われた。その結果、平成6年4月に確認調査を実施し、その結果をみて本調査の期間・調査時期・調査費用等について協議することとした。

確認調査は、町教育委員会が主体となり、県教育委員会文化課の関野哲夫指導主事が、調査の指導にあたった。調査は、対象地の地形がほぼ平坦であることと、周辺の発掘調査で土層の堆積が複雑でないことが明らかであることから、任意の位置に試掘坑を3箇所設定して平成6年4月14日・15日の両日行われた。調査は、遺物包含層と遺構の検出面の層的位置の確認を行い、土層観察後、写真撮影を行い、試掘坑をビニールで覆って埋め戻して、改めて本調査（第5次調査）を実施することとした。

第2節 調査の経過

第5次調査は、第1次調査より手掛けていた加藤学園考古学研究所の秋本が担当することとなり、平成6年7月12日に県文化課において、県文化課・芝川町教育委員会・加藤学園考古学研究所の三者により、小塚遺跡第5次調査に関する第1回の打ち合わせが行われ、22日には芝川町教育委員会において第2回の最終的打ち合わせが三者間で行われた。この打ち合わせにより、調査を8月1日より開始することとし、芝川町教育委員会と加藤学園考古学研究所と話し合いにより、調査に必要な機材等を事前に準備することになった。以下、調査の経過を日誌より抄録しておく。

8月1日（月）晴れ

本日より小塚遺跡第5次調査を開始する。発掘器材を研究所から現地に運搬し、コンテナハウス・トイレを金刺建設の所有地へ設置し、駐車場及び調査現場までの通路部分と調査予定地の草刈を行う。その後、調査区域を設定し、ミニバックホーで表土（耕作土）の除去作業を開始する。

8月2日（火）晴れ

昨日に引き続きミニバックホーにて表土の除去作業を行う。また、調査区域を四分割して東西方向に西よりA・B、南北方向に北より1・2区とする。A-1区よりミニバックホーにて耕作土の除去後の残土の処理を開始する。

8月3日（水）晴れ

A-2区とB-1・2区をミニバックホーにて耕作土の除去作業を行い、その後、残土の処理を行う。また、A-1区の出土遺物の分布実測及び出土レベルの計測を行い、

遺物を収納する。

8月4日（木）晴れのち一時曇り

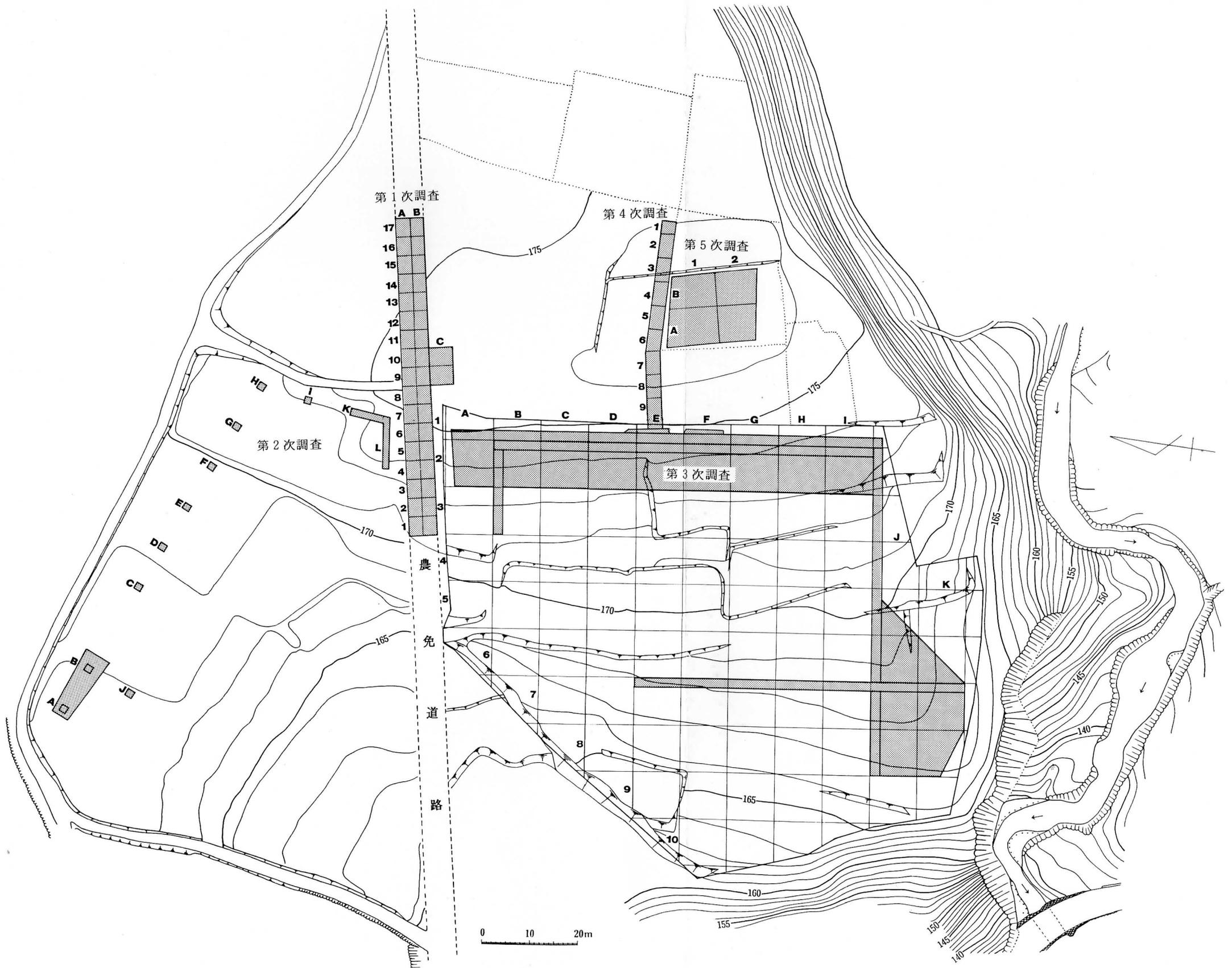
A-1区は5層の精査、石鏃が1点出土する。A-2区及びB-2区の出土遺物の分布実測と遺物の出土レベルを計測し、その後、遺物を収納する。

8月5日（金）晴れのち曇り

A-1区及びA-2区の4～5層の精査を行う。A-1区より集石土壇2基を確認する。また、A-1区の出土遺物の分布実測と遺物の出土レベルを計測し、その後、遺物を収納する。

8月6日（土）晴れ時々曇り

A-2区の4～5層の精査を行う。遺物が多く出土する。A-1区とA-2区は出土遺物の分布実測及び出土レベルの計測を行い、その後、遺物を収納する。また、第2集石土壇の確認のための精査に入る。



第2図 調査位置図 (第1次~第5次調査)

8月7日(日) 晴れのち曇り

定休日のため作業は休止。

8月8日(月) 晴れ時々曇り

B-1区の5層の精査を行う。遺物が多く出土する。A-2区は出土遺物の分布実測及び出土レベルの計測を行い、その後、遺物を収納する。

8月9日(火) 晴れ時々曇り

B-1・2区の5層の精査を行う。遺物がやや多く出土する。A-1・2区とB-1区の出土遺物の分布実測及び出土レベルの計測を行い、その後、遺物を収納する。

8月10日(水) 晴れ

研究所の整理室の引っ越しのため、作業は休止。

8月11日(木) 晴れ時々曇り

A-1区及びA-2区の5層下部の精査を行う。B-2区は出土遺物の分布実測及び出土レベルの計測を行い、その後、遺物を収納する。

8月12日(金) 晴れ時々小雨

A-2区及びB-1区の5層下部の精査を行う。A-1区の5層下部出土の遺物の分布実測及び出土レベルの計測を行い、その後、遺物を収納する。

明日より3日間お盆休みのため、集石土壌へビニールシートで覆う。

8月13日(土)～15日(月) 晴れ

お盆休みのため、作業は休止。

8月16日(火) 晴れ

B-1区は5層の精査を行う。A-2区の出土遺物の分布実測及び出土レベルの計測を行い、その後、遺物を収納する。また、B-1区より出土した打製石斧とA-2区よ

り出土した石錐の出土状態の写真撮影を行う。

8月17日(水) 晴れ

B-1区及びB-2区の5層の精査を行う。B-1区とA-2区の出土遺物の分布実測及び出土レベルの計測を行い、その後、遺物を収納する。また、遺物の出土状態と調査風景の写真撮影も行い、第3次調査の際のT-6杭より標高移動を行う。

8月18日(木) 晴れ

B-2区の5層の精査とA-1・2区及びB-1区出土の際の分布実測を行い、出土レベルも計測する。

8月19日(金) 晴れのち時々曇り

A-2区とB-2区の5層下部の精査を行う。また、B-2区の出土遺物の分布実測及び出土レベルの計測を行い、その後、遺物を収納する。

8月20日(土) 曇りのち小雨

B-2区の5層下部とA-1区の5層下部から6層上部の精査を行う。また、A-1・2区とB-1区の出土遺物の分布実測及び出土レベルの計測を行い、その後、遺物を収納する。

8月21日(日) 晴れのち雷雨

定休日のため作業は休止。

8月22日(月) 晴れ時々曇り

A-1・2区とB-1区は5層下部から6層上部の精査を行う。また、A-1区とB-2区の出土遺物の分布実測及び出土レベルの計測を行い、その後、遺物を収納する。さらに、第3集石土壌の確認のための精査を行う。

8月23日(火) 晴れ

A-2区とB-2区は5層下部から6層上部の精査を行



第3図 第5次調査風景

第4章 遺跡の内容

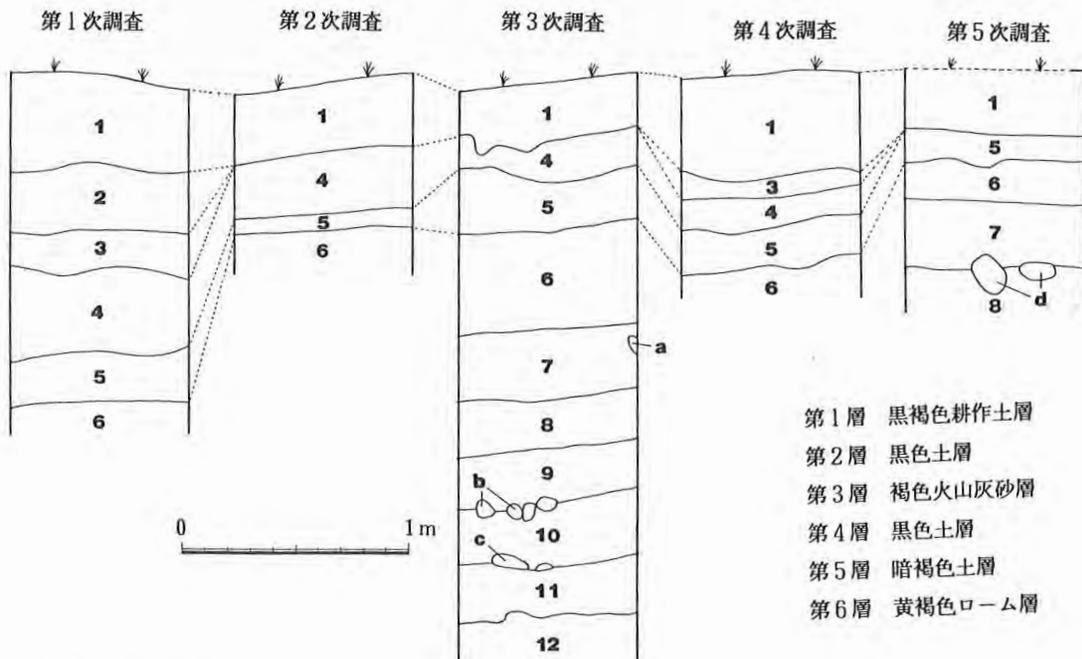
第1節 第5次調査地点と土層

1. 第5次調査地点

第5次調査地点は、第2図に見るように小塚遺跡の最も起伏した平坦部に位置する。第1次調査地点は農免道路の路線敷で、第2次調査地点は農免道路に北隣する部分であった。第3次調査地点は農免道路を挟んで第2次調査地点の南側の緩やかな西斜面であった。第4次調査地点は第3次調査地点のほぼ中央から東へ伸びる町道の路線敷で、起伏部のやや北側を東西方向に通る、第3次調査地点に接する。第5次調査地点は、この第4次調査地点の南側で、先に述べたように起伏した平坦部のほぼ中央に位置する。

2. 土層

第1次調査時に、調査区域の東端のA-17区及びB-17区において6層に分けられた。それによると、第1層はスコリアを比較的多く含む黒褐色の耕作土層で、第2層は少量のスコリアを含む黒色土層、第3層は褐色火山灰砂層で、乾燥すると白味を帯びて薄茶色に変色をする。第4層は少量のスコリアを含み、比較的粘質のある黒色土層、第5層は暗褐色土層で、第1層に比較すると若干黄色味を帯び、第4層よりも粘質が強い土層である。第6層は黄褐色ローム層であった。これらの土層は遺跡の全域で見られるのではなく、第2・3層は主に東側の谷頭部に見られる土層であって、他の所では耕作などにより失われている。第1次調査より第5次調査の土層を見ると第5図のよう

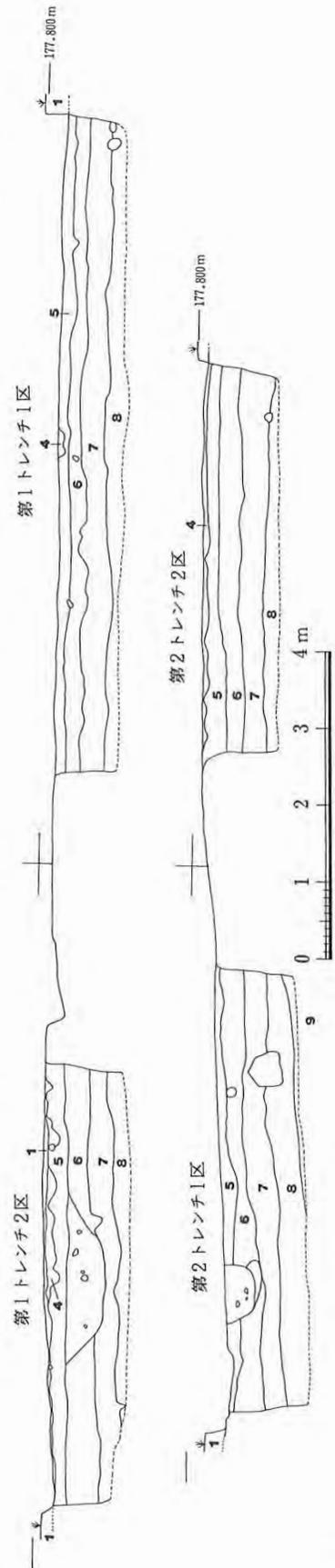


第5図 土層柱状図（第1次～第5次調査）

になる。第5次調査地点に見るように平坦部ほど第6層までの深さは浅くなる。

第5次調査における土層の状態を見ると、

- 第1層 スコリアを比較的多く含み、黒褐色を呈する表土層（耕作土層）で、町道側には町道整備の時の埋め土などが見られる。調査区域は重機でこの土層を除去したため、正確な層厚ではないが30cm前後堆積していた。
- 第2層 少量のスコリアを含む黒色土層であるが、耕作などにより失われていた。
- 第3層 褐色の火山灰砂層で、この土層も見られなかった。起伏した平坦部のため火山灰堆積後雨水などにより流失したか、あるいは耕作などにより失われたと思われる。
- 第4層 比較的粘性のある黒色土層で、少量のスコリアを含む。第1層の下層に部分的に見られ、調査区域の南側で見られた。この土層より縄文土器片などが出土した。
- 第5層 暗褐色土層で、調査区域全域に見られる。A・B-1区では上層の一部が耕作により失われている。層の厚さは12~20cm前後である。この土層より縄文時代の遺物が出土し、この層の最下部から第6層上部にかけて、第3次調査の際に縄文時代草創期の遺物が出土した。
- 第6層 黄褐色を呈するローム層で、粒径1~2mmの赤色スコリアを若干含む。この層より第1次調査の時に先土器時代の遺物を多く出土し、第3次調査でも若干の遺物が出土した。今回の調査でも剥片が10数点出土した。
- 第7層 暗褐色土層で、粒径2~3mm前後の橙色スコリアを比較的多く含み、やや粘性を有する。この土層より第3次調査の際に、剥片などの遺物が出土した。今回の第5次調査では剥片1点が出土した。
- 第8層 褐色土層で、粒径2~7mm前後の橙色スコリアと黒色スコリア及び粒径2mm前後の黄褐色スコリアを多く含む。この土層以下は無遺物層である。



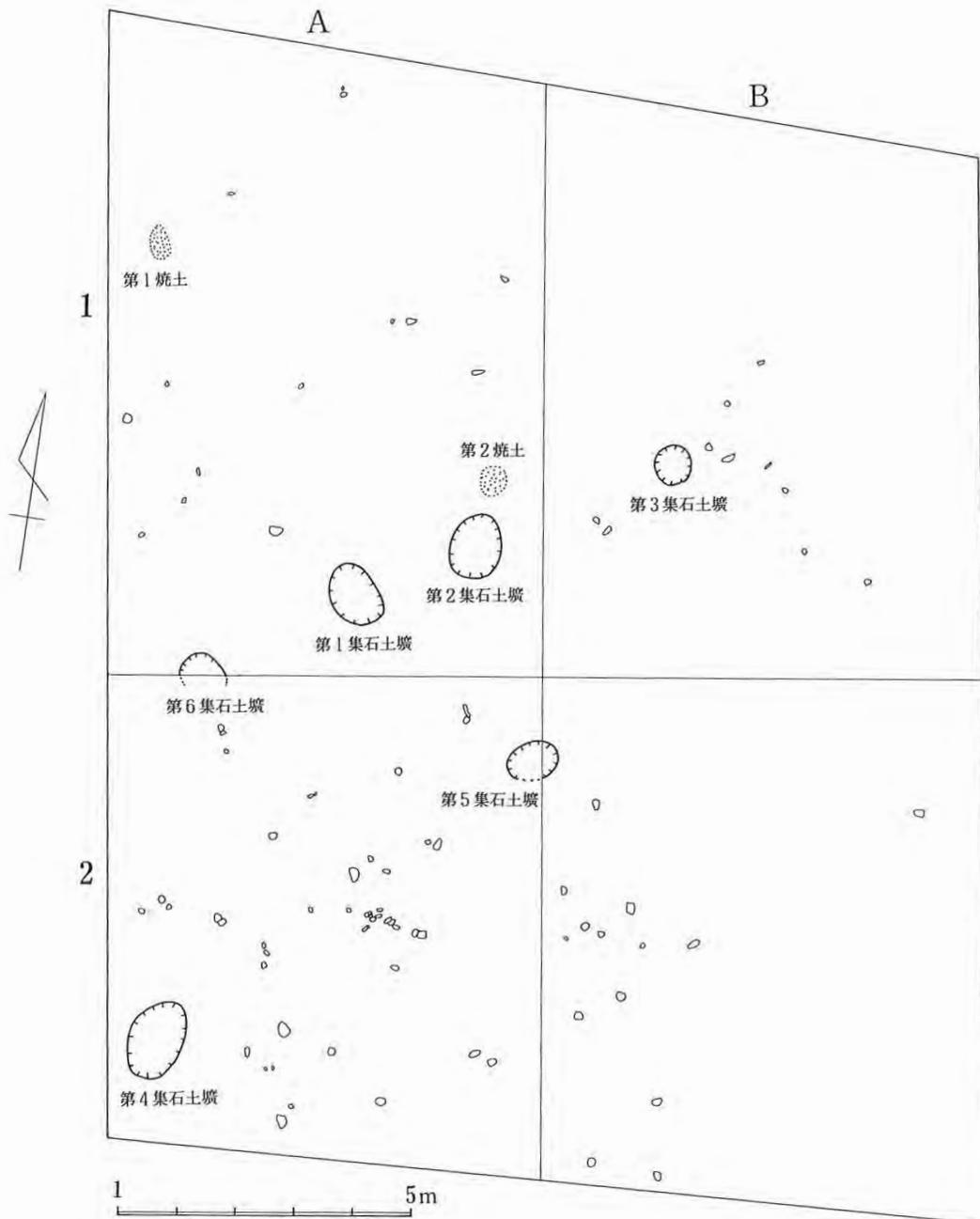
第6図 土層断面実測図

第2節 遺構

今回の調査で検出された遺構は、第7図に示すように、集石土壇6基と焼土2ヶ所であった。確認された面は集石土壇が第5層上面もしくは上部、焼土は第5層中であつた。

第1集石土壇 (第7図・第8図)

A-1区の南側より検出され、確認面は耕作土を除去後、精査を行った際に確認されたので、第5層の上面あるいは上部と考えられる。平面形は不整な楕円形に近い形状を呈し、その大きさは長



第7図 遺構関連図

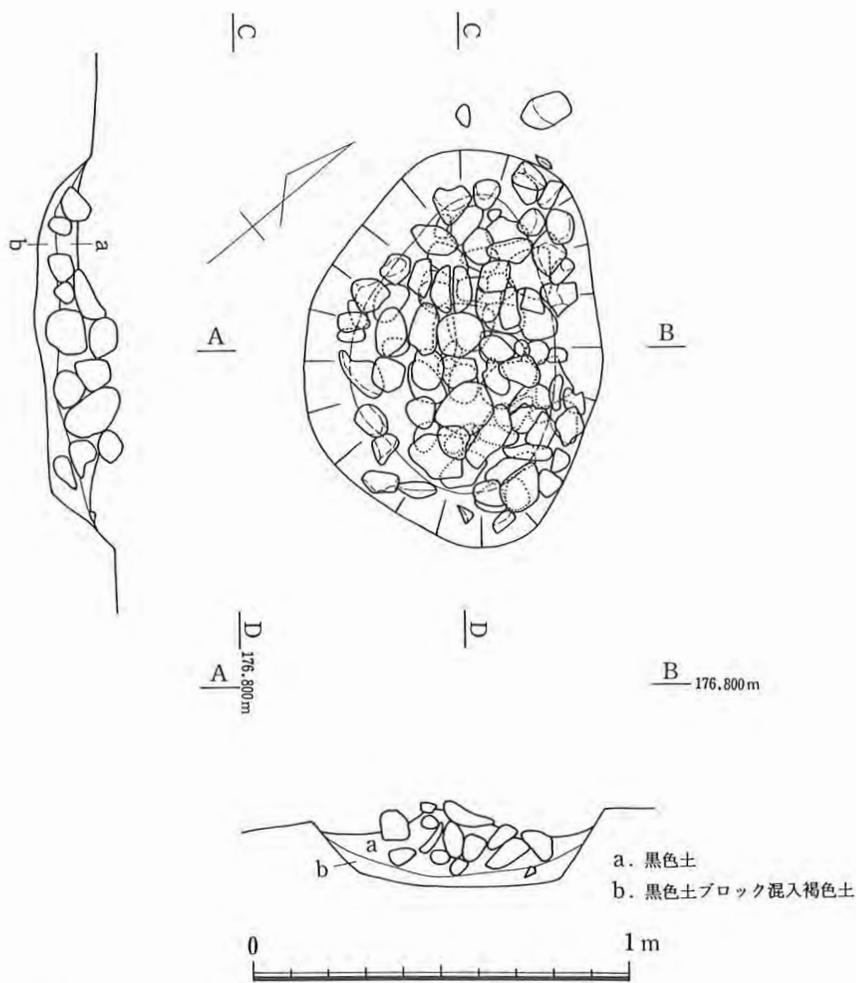
径1.06m、短径0.79m
 で、確認面から底面ま
 での深さは0.20mで
 あった。底面は平坦で、
 壁は緩やかに立ち上
 がる。この集石土壇は、
 拳ほどの大小の礫が充
 填されており、101個
 の礫を数えた。覆土は
 2層からなり、上層は
 黒色土で、この中にほ
 とんどの礫が包含され
 ていた。下層は黒色土
 の小ブロックを混入す
 る褐色土で、中央部
 では底面より4cmほど
 堆積していた。

この集石土壇内から
 の出土遺物は微量で、
 土器の破片2点（第17
 図1・2）と頁岩及び
 黒耀石の破片がそれぞ
 れ1点出土した。

第2集石土壇（第7図・第9図）

A-1区の南東側で検出された集石土壇で、第1集石土壇の北東側へ約2mの所に位置する。確認面は、耕作土の除去後の精査で検出されたので、第5層の上面あるいは上部と考えられる。平面形は第1集石土壇と同様に不整な楕円形を呈し、その大きさは、長径1.05m、短径0.83mで、確認面から底面までの深さは0.31mであった。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。この集石土壇内には、拳大ほどから小さく剝離した礫片まで含め、154個の大小の礫が充填されていた。この礫の中には、火を受けて細片となってまとまって、土壇内の北東側から検出されている。覆土は2層からなり、上層は黒褐色土で、下部に行くほど炭化物を多く含む。この土層中にほとんどの礫が包含されていた。下層は黒色土と褐色土の小ブロックを混入する褐色土で、やや炭化物を含む。この層は、土壇内中央部で底面より7~2cmほど堆積していた。また、土壇内の西側では、上層と下層との間に、炭化物を多量に含む黒色土が一部で見られた。

この集石土壇内から縄文土器の破片3点（第17図3~5）と、磨石1点及び黒耀石・頁岩の破片数点がそれぞれ出土した。

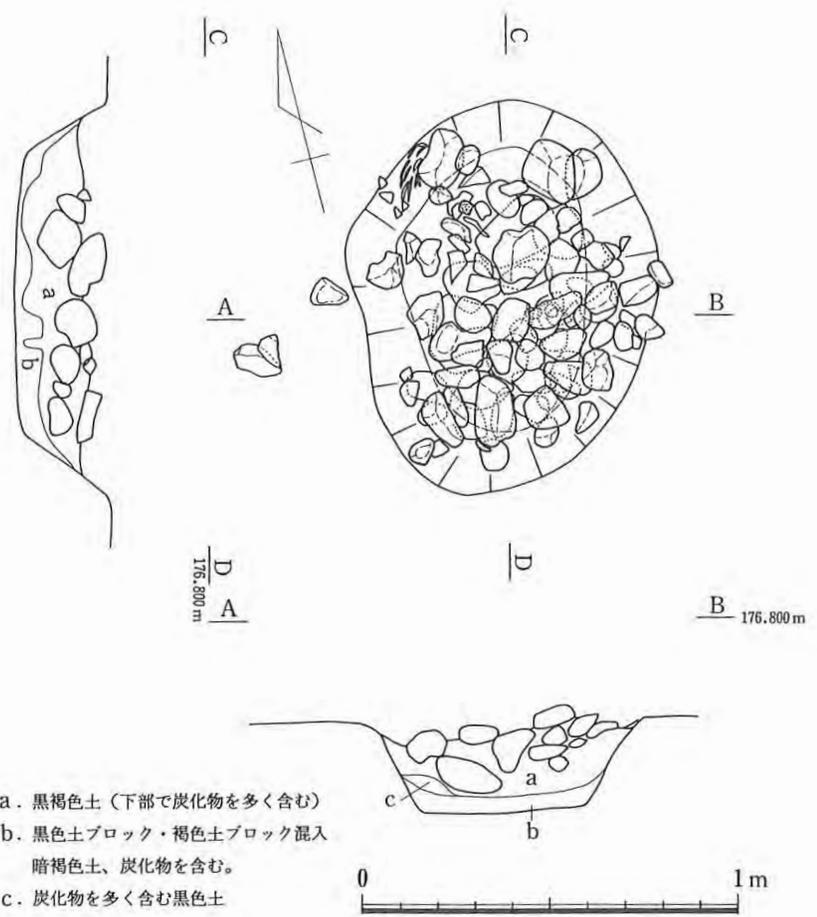


第8図 第1集石土壇実測図

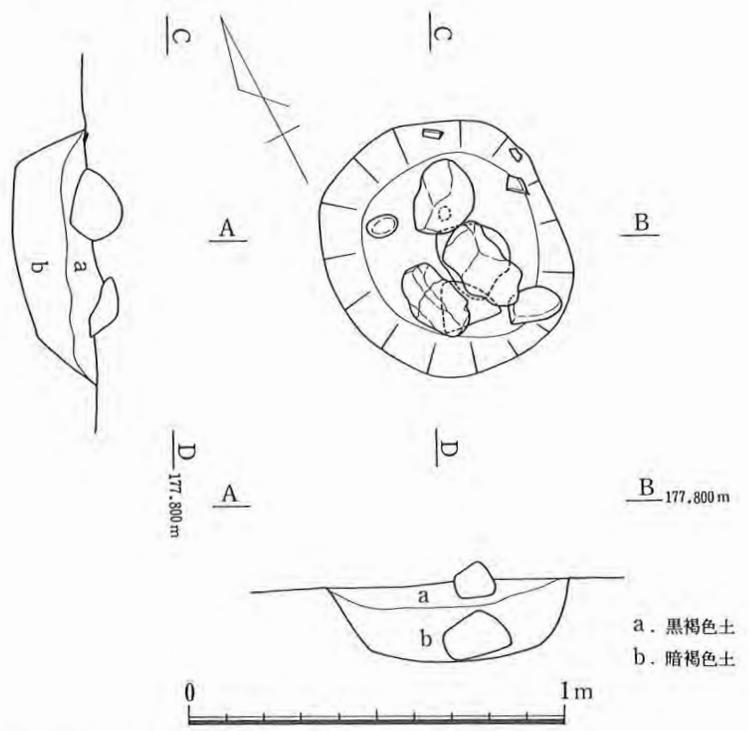
第3集石土壙(第7図・第10図)

B-1区の南西側より検出された集石土壙で、第2集石土壙の北東側へ約3.5mの所に位置する。確認面は、耕作土の除去後の精査で検出されたので、第5層の上面あるいは上部と考えられる。平面形はやや不整な円形に近い形状を呈し、その大きさは、長径0.63m、短径0.61mと他に比較して小型であった。確認面から底面までの深さは0.24m、底面は中央部が若干窪むがほぼ平坦で、北側にやや傾斜する。壁は緩やかに立ち上がり、この土壙内には人頭大から拳ほどの小礫まで9個の礫が出土した。覆土は2層からなり、上層は黒褐色土、下層は暗褐色土で、礫は上下2層に混入していた。下層の暗褐色土は、土壙中央部で底面より15cmとやや厚く堆積していた。

この土壙内より縄文時代早期及び前期の土器の破片6点(第17図6~11)と、石匙・石核各1点及び黒耀石・頁岩の剝片が数点出土した。



第9図 第2集石土壙実測図



第10図 第3集石土壙実測図

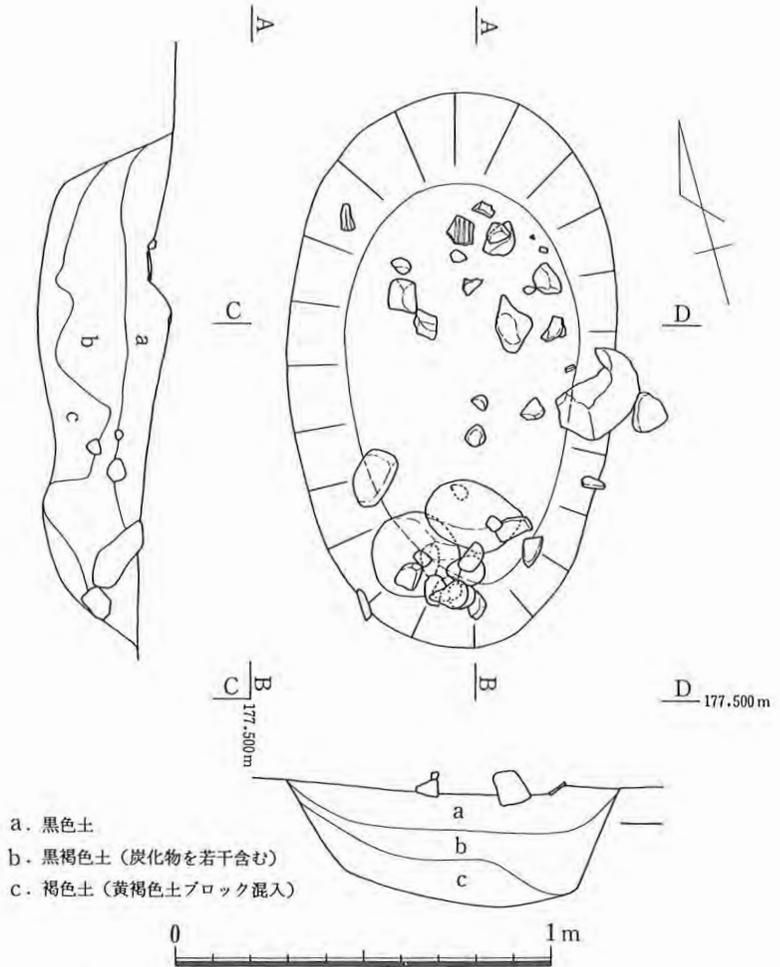
第4集石土壙（第7図・第11図）

A-2区の南西隅より検出され、第1集石土壙から南南西方向に約8mの所に位置する。確認面は第5層の上面で、平面形は不整な楕円形を呈する。その大きさは長径1.48m、短径0.88mで、確認面から底面までの深さは0.36mとやや深い。底面は多少の凹凸があるものの比較的平坦で、東側へ傾斜し、壁は比較的緩やかに立ち上がっていた。また、この土壙は木根により一部で攪乱を受けており、土壙内からは人頭大から拳大の礫が35個出土した。覆土は3層からなり、上層は黒色土、中層は炭化物を若干含む黒褐色土、下層は黄褐色土のブロックを混入する褐色土で、ほとんどの礫は上層と中層に包含され、上層の方が多く出土した。

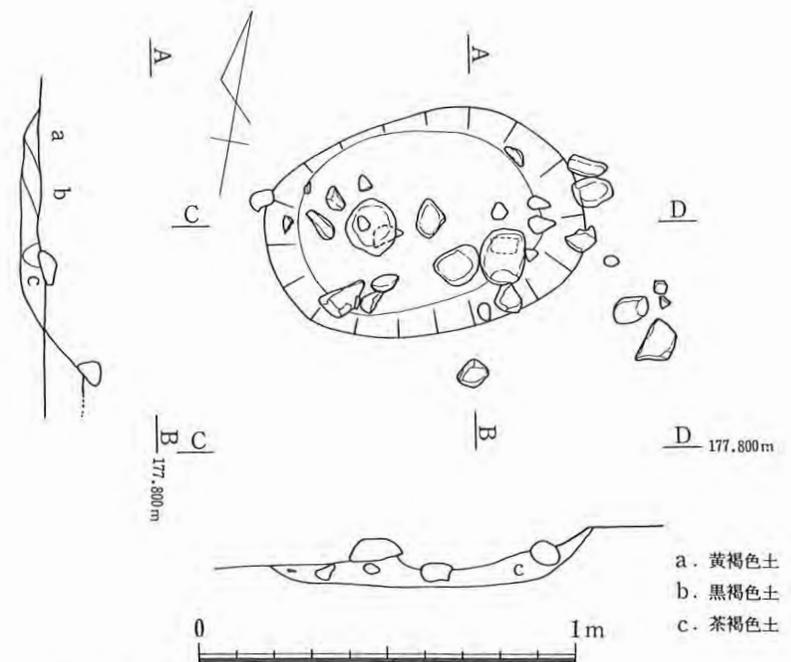
この土壙内より縄文時代早期・前期の土器片9点（第17図12~20）と石鏃3点、刃器状剥片1点、磨石2点及び黒耀石と頁岩の剥片6点が出土した。

第5集石土壙（第7図・第12図）

A-2区の北側で、B-2区にかけて検出された集



第11図 第4集石土壙実測図



第12図 第5集石土壙実測図

石土壙で、第1集石土壙より南東方向へ約4mの所に位置する。確認面は第5層の上面で、耕作土の除去後の精査で検出された。平面形は不整な楕円形を呈し、その大きさは長径0.84m、短径0.58mで、確認面から底面までの深さは0.05~0.15mと浅く、上部は耕作により削られている。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がり、土壙内からは礫が21個出土した。覆土は黄褐色土・黒褐色土・茶褐色土の3層に分けられるが、黄褐色土と黒褐色土は土壙内の北側の一部に見られ、全体的には茶褐色土であった。礫のほとんどは茶褐色土内から、底面より浮いた状態で出土した。

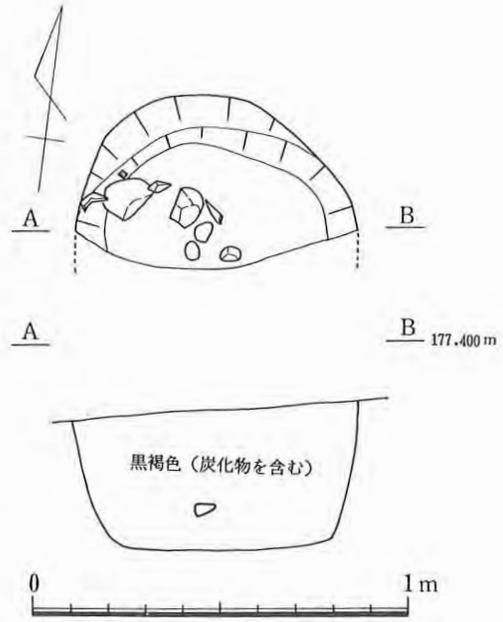
この土壙内より縄文土器片6点と石皿1点及び黒耀石・頁岩の剝片が出土した。

第6集石土壙（第7図・第13図）

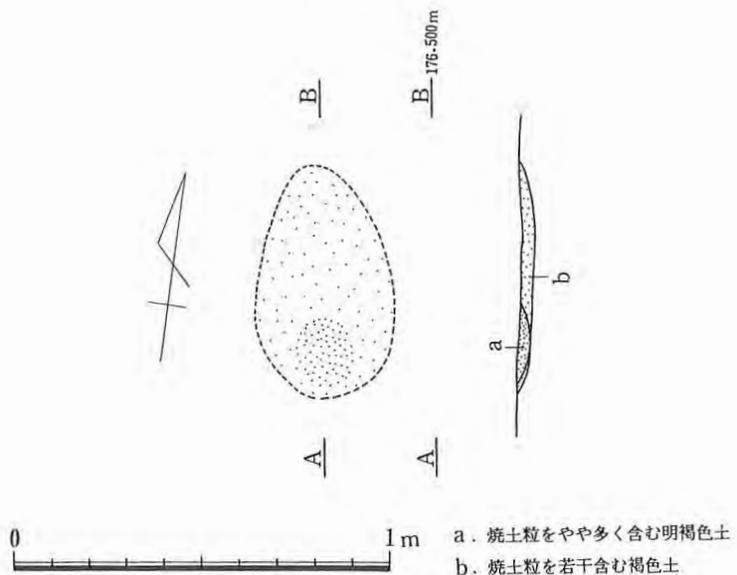
A-1区の南西側で検出され、第1集石土壙より南西方向へ約2.5mの所に位置する。この土壙は、下層における遺物包含層の有無確認のため、A-2区に設定した第2トレンチ1区の北壁で確認された。そのため、土壙の南半分は削り取られてしまった。土壙の確認面は第6層上面で、平面形は楕円形を呈すると思われる。その大きさは長径は不明であるが、短径は0.75m前後と推測される。確認面から底面までの深さは0.36mとやや深く、底面は平坦である。壁は底面より比較的急に立ち上がる。土壙内からは礫が8個出土した。覆土は上部では黒味が少なく、下部へいくほど黒味を増す黒褐色土で、炭化物を少量含む。この土壙内より遺物は出土しなかった。

第1焼土（第7図・第14図）

A-1区の北西側より検出された焼土で、確認面は第5層の中位であった。焼土の大きさは長径0.61m、短径0.37mで、平面形は卵形状を呈し、断面形は浅い皿状を呈する。焼土の南側で径16×17cm、厚さ3cmの範囲で焼土粒をやや多く含む明褐色土、他の部分は厚さ3cmの焼土粒を若干含む褐色土であった。全体的には薄く焼けた程度の焼土で、焼土内より遺物は出土しなかった。



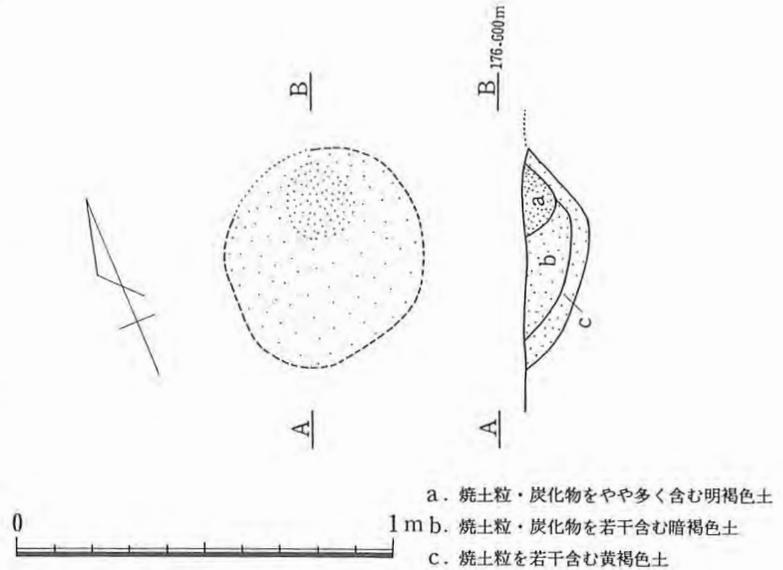
第13図 第6集石土壙実測図



第14図 第1焼土実測図

第2焼土 (第7図・第15図)

A-1区の第2集石土壙の北側約1mの所より検出された焼土で、確認面は第5層の中位であった。焼土の大きさは長径0.59m、短径0.53mで、平面形は不整な円形を呈し、その断面形は凸レンズ状を呈する。焼土の北側で径20×18cm、厚さ9cmの範囲で焼土粒と炭化物をやや多く含む明褐色土、径48×43cm、厚さ12cm



第15図 第2焼土実測図

の範囲で焼土粒と炭化物を若干含む暗褐色土、焼土の外側を包むように厚さ5cm前後に焼土を若干含む黄褐色土であった。焼土内より遺物は出土しなかった。

以上のように、個々の遺構について述べてきたが、全体的に見ると第7図のように集石土壙は2列に配列されている。その1列は南西方向から北東方向に、南西側から第6集石土壙・第1集石土壙・第2集石土壙・第3集石土壙と並び、その南側に3～4mほど離れてほぼ平行して他の1列がある。この列は南西側から第4集石土壙・第5集石土壙と並ぶように思われるが、その間隔は約8mと離れている。

各集石土壙の大きさは、第1集石土壙が1.06×0.79m、第2集石土壙が1.05×0.83m、第3集石土壙が0.63×0.61m、第4集石土壙が1.48×0.88m、第5集石土壙が0.84×0.58mで、第6集石土壙は不明であった。その形状は第1・第2・第4・第5集石土壙が不整な楕円形、第3集石土壙がほぼ円形を呈する。従って、集石土壙には長径1～1.4m、短径0.8m前後で楕円形を呈するものと、径が0.6m前後で円形に近い形状を呈するものと2つのタイプ分けられる。

覆土は黒色土あるいは黒褐色土で、第5集石土壙だけが茶褐色土であった。従って、黒色土は第4層の黒色土が土壙内に堆積しているものと考えられ、黒褐色土は第5層の暗褐色土と混合して形成されたものと思われる。

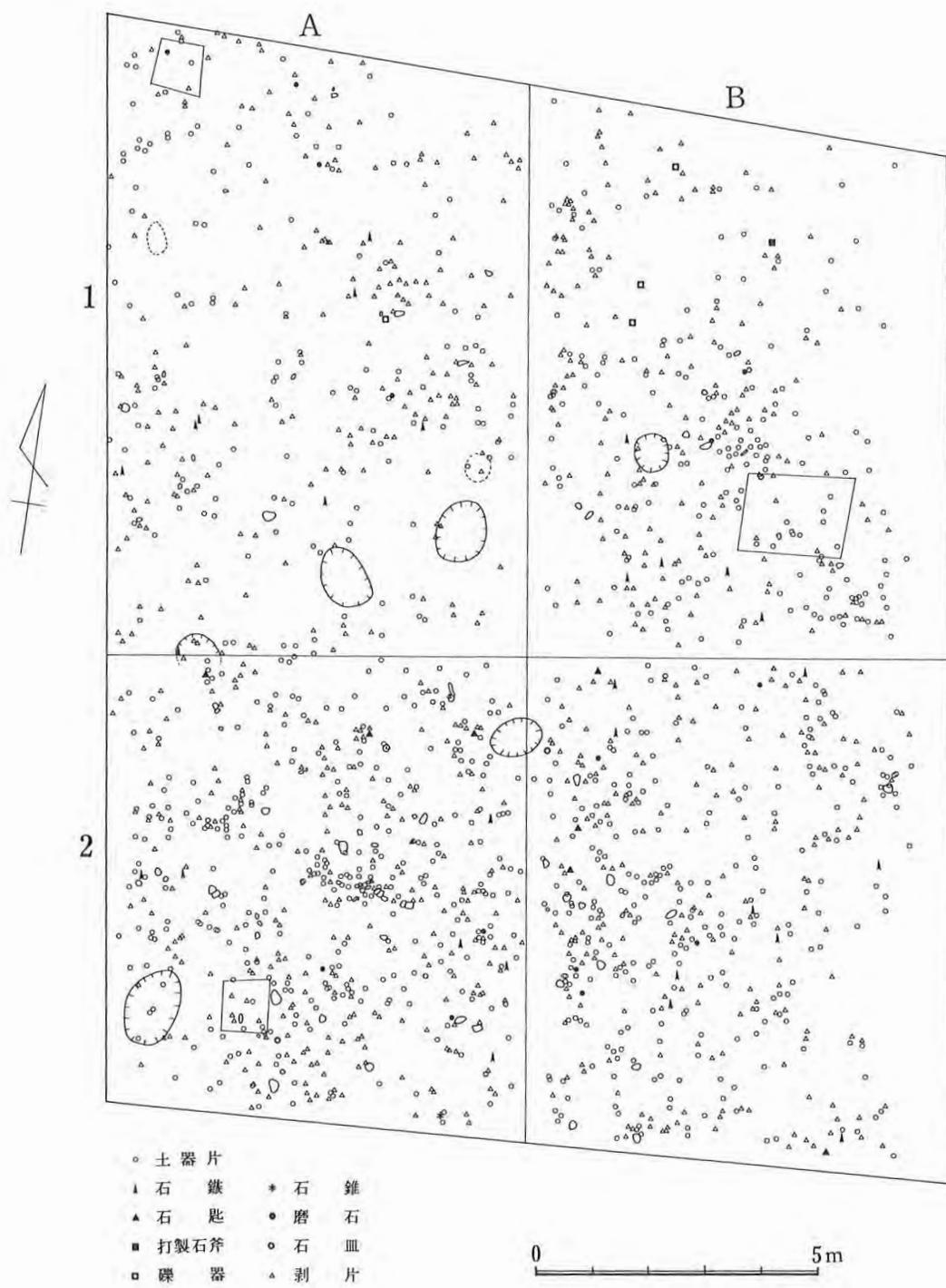
出土した礫の数を見ると、第1集石土壙が101個、第2集石土壙が154個、第3集石土壙が9個、第4集石土壙が35個、第5集石土壙が21個、第6集石土壙8個であった。集石ということから見ると、第1～第3集石土壙はそれに該当すると思われるが、他の第4～第6集石土壙は単なる土壙と言った方が適切かも知れない。ここでは集石土壙として取り扱った。

時期について見ると、土壙内からの出土した土器は、第17図に示すように縄文時代の早期・前期のものであって、早期の土器片は、集石土壙を構築する際に混入されたものと考えられ、土壙内の覆土が黒色土あるいは黒褐色土である事からも、縄文時代前期の集石土壙と思われる。

焼土は2ヶ所で検出されたが、形状などは異にしていた。

第5章 出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、縄文土器と石鏃・石匙・石錐・打製石斧・礫器・磨石・石皿などの石器と、その素材や制作過程で生じた石屑である剥片・碎片であった。その出土分布状態は、第



第16図 出土遺物分布図

16図に見るように調査区全域にわたって出土したが、その出土量はA-2区とB-2区側がやや多く、分布にも若干の疎密が見られた。これは耕作が深くまでおよび、遺物包含層が削り取られたためと思われる。

第1節 土 器

今回の調査において出土した土器は、過去数回の調査での出土量に比べて比較的多かった。その出土した層位は第4層から第5層であり、第4層は耕作などにより削られて上部は失われていた。従って、主な出土層位は第5層であった。縄文時代早期の土器を第I群、縄文時代前期の土器を第II群と分類した。

第I群土器（第17図1～3・6・12・13、第18図、第19図）

早期の土器を本群とし、押型文を有するものを1類、撚糸文を有するものを2類、鶺鴒ヶ島台式に比定されるものを3類、沈線文を有するものを4類、粕畑式に比定される列点状の刺突文を有するものを5類、条痕文のみを有するものを6類、縄文のみを有するものを7類、無文のものを8類とした。

1類土器（第17図12、第18図1～20）

楕円押型文で、楕円の粒子が比較的小さくやや薄手のものをa種、楕円の粒子が大きく厚手のものをb種、楕円の粒子が粗大で厚手のものをc種に細分した。

a種（第18図1） 楕円押型文で粒子が比較的小さく、器肉は7mmとやや薄手のもので、楕円の粒は明瞭性を欠く。色調はにぶい赤褐色を呈し、胎土中には石英粒・砂粒などを含み、雲母を多く含有する。

b種（第17図12、第18図3～9・11～13・15） 楕円の粒子が大きく厚手のもので、施文方向は縦・横・斜めなど一定せず無秩序に施されている。第18図15は口縁部、同図3～11・13・15は胴部、第17図12は口縁部付近の破片である。第17図2と第18図15は、内面に斜行する太い沈線が施されている。器肉は10～19mmと厚く、色調は明褐色・にぶい黄橙・にぶい赤褐色・にぶい黄褐色・褐色・明褐色などを呈し、胎土中には石英粒や砂粒・白色砂粒などを多く含み、雲母の細片を若干含むものもある。また、繊維もやや多く含むものも多い。

c種（第18図2・10・14・16～20） 楕円の粒子が粗大のもので、2は口縁部、他は胴部の破片である。16～20のように楕円の粒子が非常に粗大のものもある。2と14は器面の風化が著しく明瞭性を欠くが、粗大の楕円が押捺されている。器肉は11～14mmと厚く、色調は褐色・黄褐色・明赤褐色などを呈し、胎土中には石英粒や砂粒・白色砂粒などを多く含み、雲母の細片を若干含むものもある。また、繊維もやや多く含む。

2類土器（第17図1・2・6）

撚糸文が施されたもので、1は横方向、2・6は縦あるいはやや斜行する撚糸文が見られる。器肉は11～15mmと厚く、撚糸原体は1・2が比較的小さい、6はやや太い。色調はにぶい橙色・にぶい黄橙色を呈し、胎土中には石英粒や砂粒などを比較的多く含み、繊維もやや多く混入している。

3類土器（第17図3、第18図21～33、第19図1・2）

鶴ヶ島台式に比定されるもので、地文に条痕を施し、沈線または微隆線で区画し、その中を平行する沈線または押し引きによる沈線が施文されている。また、区画した沈線または微隆線に交互に刺突文が施されたものもある。器形は胴部上半に1～2段の段部を有し、段部には列点状の刻み目を有する。色調は赤褐色・明赤褐色・灰褐色・にぶい黄褐色・黄褐色・褐色・暗褐色などを呈し、胎土中には石英粒・砂粒などを比較的多く含み、繊維も含まれる。

4 類土器 (第19図3～5)

沈線文を有するもので、3には縦方向の沈線とやや斜行する沈線が交叉するように浅く施文されている。その下方には斜行する平行沈線が見られ、その上端には列点状の刺突文が施されている。色調はにぶい褐色を呈し、胎土中には、石英粒や砂粒を比較的多く、雲母は多く含み、繊維も含まれている。4・5は同一個体と思われ、やや太い沈線文が深く施されたもので、色調は明赤褐色を呈し、胎土中には石英粒や砂粒・繊維などを含む。

5 類土器 (第19図6～12)

粕畑式に比定されるもので、地文は条痕文あるいは無文で、列点状の刺突文が施文されている。6は口縁部の破片で、口唇部外縁には細かな刻み目を有する。9～11には緩やかな段部を有し、その段部にも列点状の刺突文が施されている。内面には横方向あるいはやや斜行する条痕を有する。色調は褐色・灰黄褐色・にぶい黄褐色・にぶい黄橙色などを呈し、胎土中には全体的に石英粒や砂粒・繊維などを比較的多く含む。

6 類土器 (第17図13、第19図13～15・19～24)

条痕文のみが施文されたもので、第19図13～15・23は横方向に、同図19～22と第17図13は斜行、第19図24は横方向と斜行する条痕がそれぞれ見られる。3類あるいは5類の胴部下半のものと思われる。色調は明赤褐色・橙色・にぶい黄褐色・にぶい黄橙色・にぶい褐色などを呈し、胎土中には全体的に石英粒や砂粒・繊維などを比較的多く含み、微量の雲母の細片を含むものも見られる。

7 類土器 (第19図16～18)

縄文のみが施文されたもので、16には横方向、17・18は斜行する縄文がそれぞれ見られる。色調は浅黄色・にぶい黄褐色を呈し、胎土中には石英粒・砂粒などを比較的多く含み、繊維の混入も多く見られる。

8 類土器 (第19図25～27)

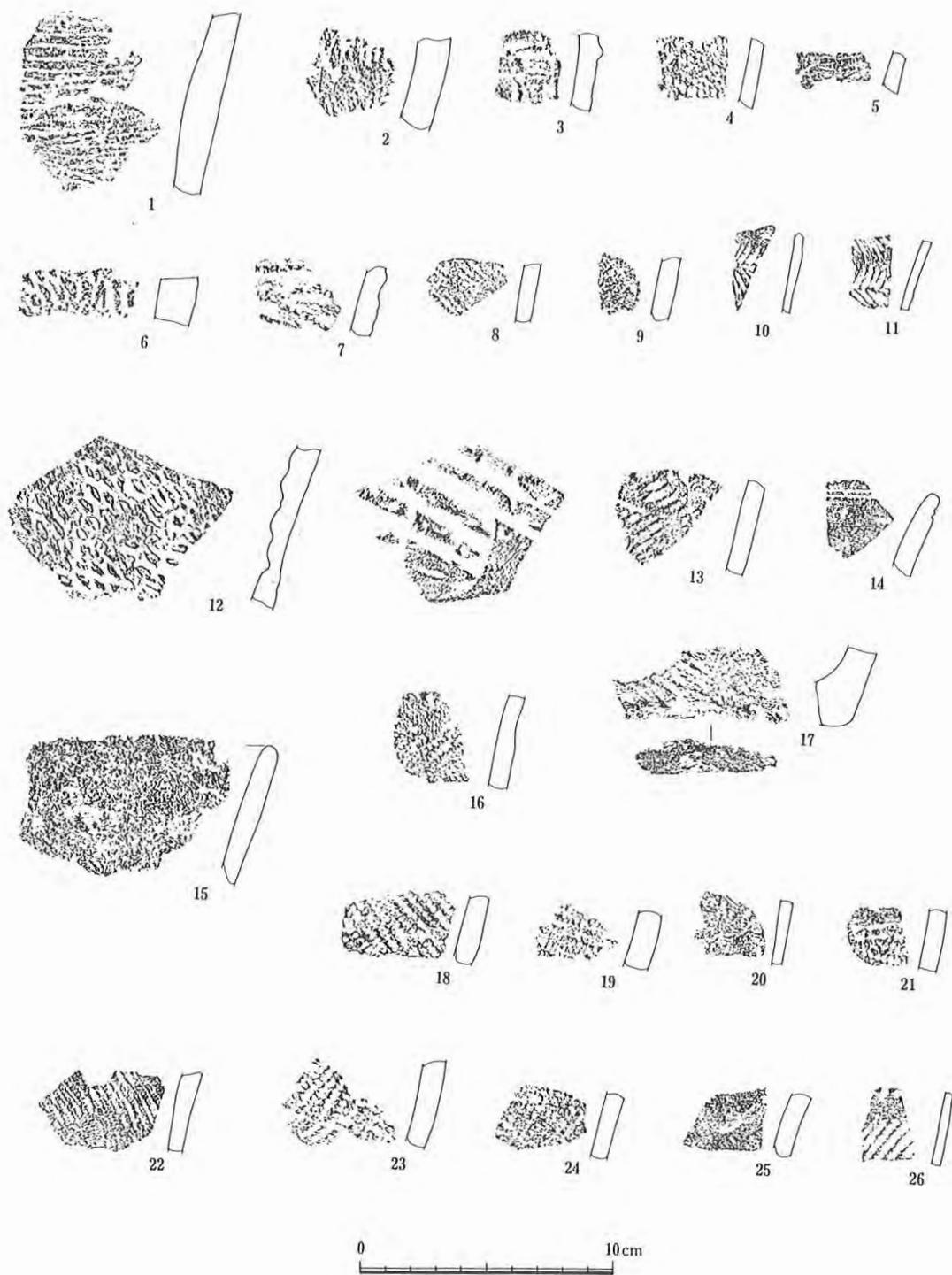
無文のものを本類とした。25破片口縁部の破片で、口唇部は肥厚して円頭状を呈する。色調は褐色を呈し、胎土中には石英粒や砂粒・繊維などを比較的多く含む。26・27は底部の破片で、平底を呈する。内外面共に施文されず、無文となる。色調はにぶい赤褐色・にぶい黄橙色を呈し、胎土中には多くの石英粒や砂粒・繊維などの混入が認められる。

第Ⅱ群土器 (第17図、第20図～第26図)

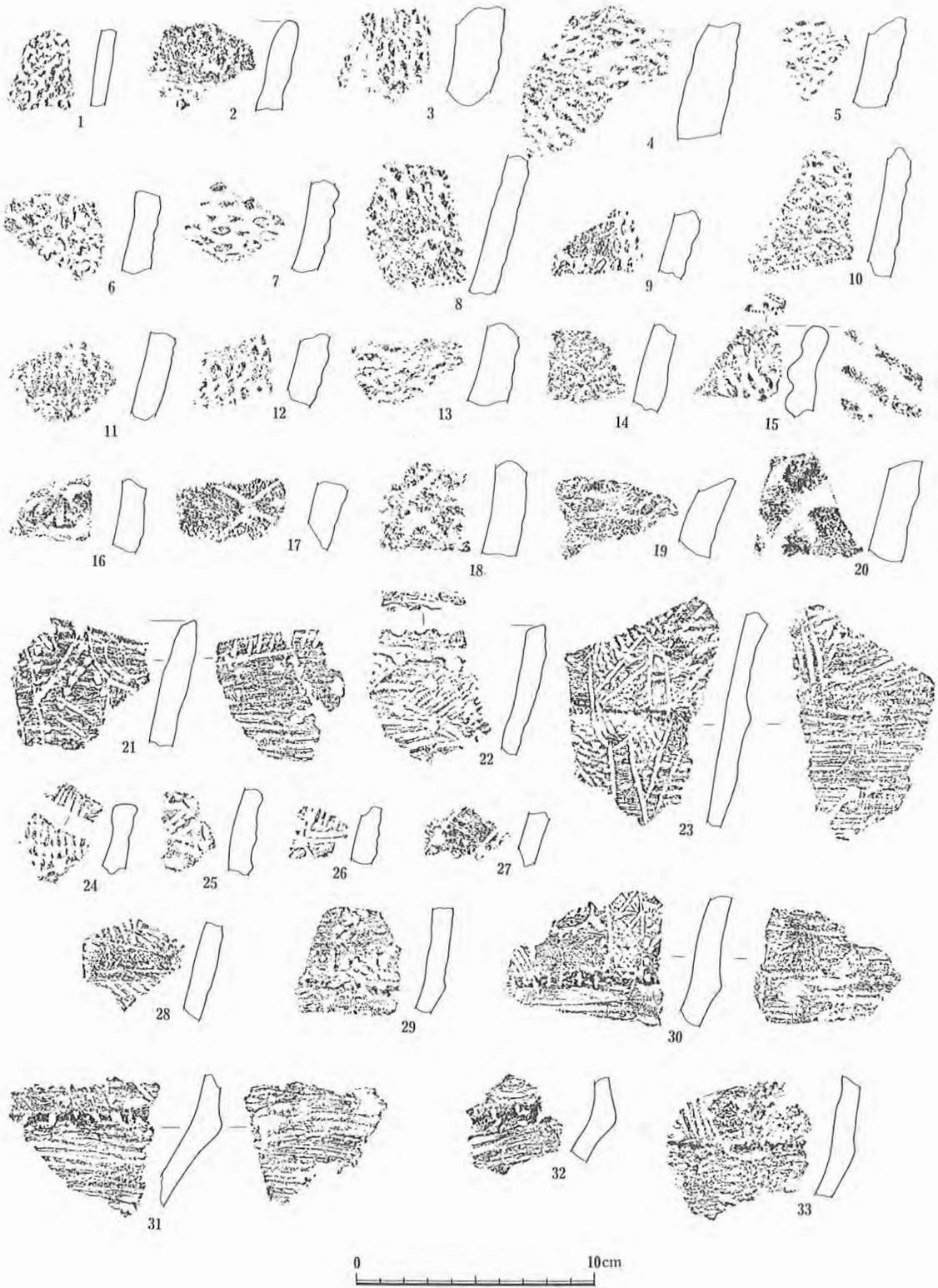
前期の土器を本群とし、文様などから1～17類に分類される。

1 類土器 (第17図10・11、第20図1～13)

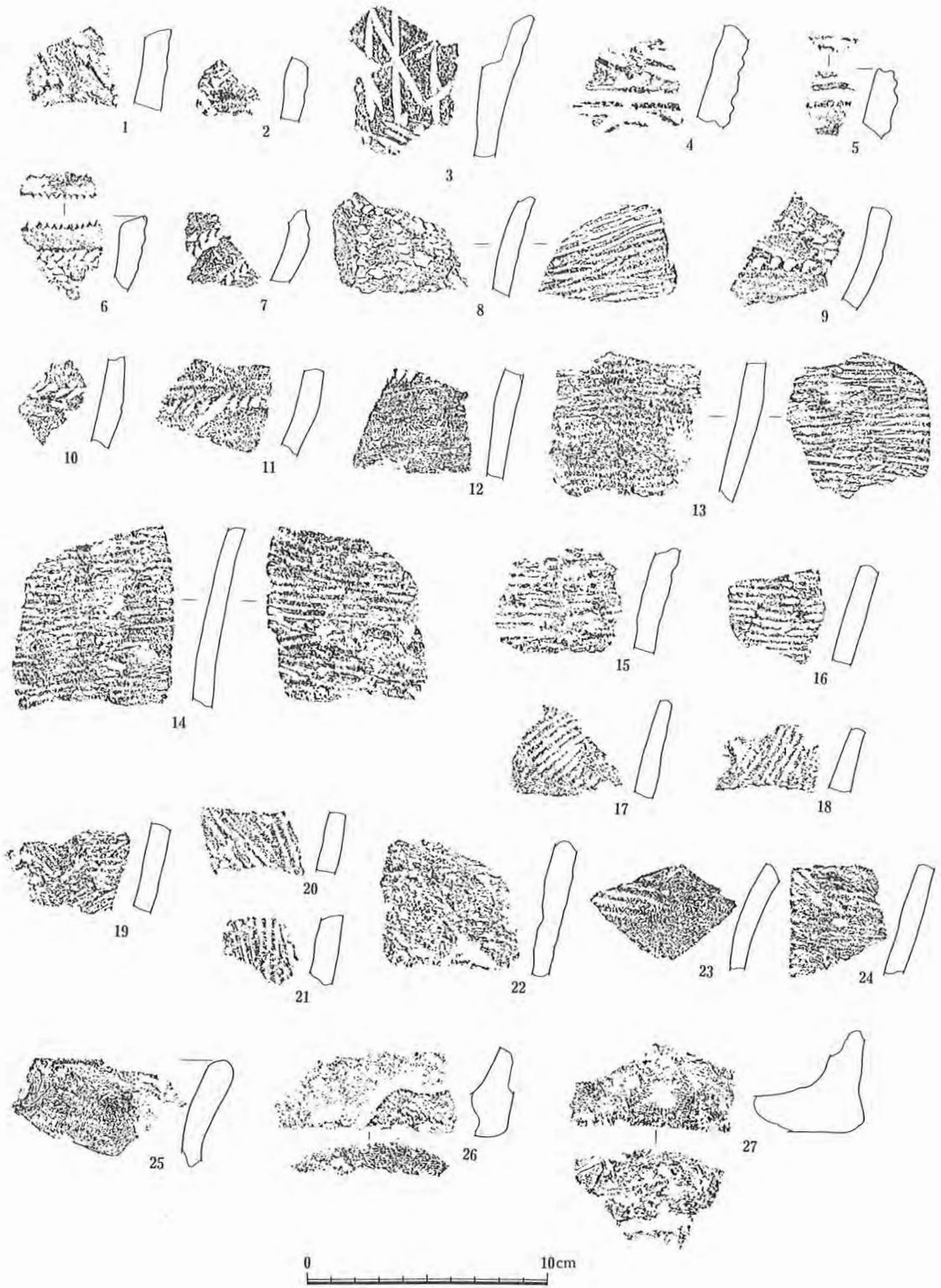
器肉が3～5mmと薄手のもので、連続爪形文を有するものである。幅の広い連続爪形文を有するものをa種、幅の狭い連続爪形文を有するものをb種に細分される。



第17图 出土土器拓影图(1)〔1・2. 第1集石土壙、3~5. 第2集石土壙、6~11. 第3集石土壙、12~20. 第4集石土壙、21~26. 第5集石土壙、(12. 第I群1類土器、1・2・6. 第I群2類土器、3. 第I群3類土器、13. 第I群6類土器、10・11. 第II群1類土器、20・26. 第II群4類土器、4・8・9・16~19・21~24. 第II群6類土器、7. 第II群7類土器、14. 第II群11類土器、5・15・25. 第II群17類土器)〕



第18图 出土土器拓影图(2) (1~20. 第I群1類土器、21~33. 第I群3類土器、(出土地点: 1・7・17・22・23・25・30~32, A-1区、5・6・8・9・16・28・33, A-2区、2~4・10・11・13・18・21・26・27, B-1区、12・14・15・19・24・29, B-2区、20. 第1トレンチ1区、出土層位: 6・11・13・17・29. 第4層、1・2・4・7~9・12・14・15・18~23・25・26・28・30~33, 第5層、3・5・10・16・24・27. 耕作土))



第19图 出土土器拓影图(3) [1·2. 第I群3類土器、3~5. 第I群4類土器、6~12. 第I群5類土器、13~15·19~24. 第I群6類土器、16~18. 第I群7類土器、25~27. 第I群8類土器、(出土地点：2·3·9·24, A-1区、4·7·10~18·20·23·26·27, A-2区、1·19·21·25, B-1区、8·22, B-2区、出土層位：14·17~19·26·27. 第4層、1·2·4~13·15·16·20~22·24·25. 第5層、3·23. 耕作土)]

a種(第17図10・11、第20図1～10・12・13) 第20図1～3・12は口縁部、他は口縁部下方から胴部上方の破片である。幅の広い連続爪形文を口縁部に沿って数段施しており、第20図1で見ると4段数えられる。1・2・12の口唇部には浅い刻み目を有し、12には口縁部内外面にも浅い列点状の沈線が施されている。また、4には連続爪形文の間に短い沈線が、連続して2条施文されている。4と9の破片の一部には丹と思われる赤色顔料が認められる。色調は明褐灰色・褐灰色・灰黄褐色・灰褐色・にぶい黄橙色・にぶい褐色などを呈し、胎土中には石英粒・砂粒などを比較的多く含むものが見られる。

b種(第20図11) 細い半截竹管による連続爪形文を施したもので、破片の上端に平行して3条、下端にやや斜行して2条見られる。この連続爪形文の間に丹と思われる赤色顔料が塗られている。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中には石英粒や砂粒などを少量含む。

2類土器(第20図14・15)

器肉が5mm前後と薄手のもので、押し引きによる連続刺突を施して列点状あるいは沈線状に施文したものである。15は口縁部の破片で、小さな波状を呈する。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中には細かな石英粒や砂粒をやや多く含む。

3類土器(第20図20)

器肉が3mm前後と薄手のもので、細い沈線が間隔をあけて描かれている。色調は灰黄褐色を呈し、胎土中には細かな石英粒や砂粒を比較的多く含む。

4類土器(第17図20・26、第20図16～19・21～48、第22図24)

器肉が3～6mmと薄手のもので、縄文が施文されているものを本類とした。第20図16～18・22～26・28・29・31・32・36・38・40～42と第22図24は羽状縄文を呈し、他は斜縄文である。また、羽状縄文となるものの内、第20図16～18は羽状となる部分が隆帯状に厚くなっている。また、第20図22～29と第17図20及び第22図24には、羽状となる部分に結節文が見られる。更に、第20図19には上下の異なる縄文の接点に列点状の刺突文を施してある。色調は全体的に黒褐色・灰褐色・褐灰色・灰黄褐色・橙色・にぶい黄橙色・にぶい褐色・にぶい橙色などを呈し、胎土中には石英粒や砂粒などを比較的多く含む。

5類土器(第20図49)

器肉が5mm前後と薄手で無文のものを本類とした。49は口縁部の破片で、口唇部には太い刻み目を有する。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土中には細かな石英粒や砂粒を少量含む。

6類土器(第17図4・8・16～19・21～24、第21図1～11、第22図1～23・25～39)

厚手で縄文を有するものを本類とした。第21図1～7は口縁部が内側へ折れ曲がっているもので、7を除き他は同一個体と思われる。口縁部は波状を呈し、波状部の口縁部側に円形を呈する粘土粒を貼り付けてある。器面には斜縄文が全面的に施文されている。同図8・9も前者と同一個体と思われる。第22図1～16は口縁部の破片で、13・14の口縁部には輪積みの痕跡が認められる。また、16の口縁部には太い刻み目が施されている。第22図17～24には結節文が見られ、そのうち24は羽状を呈する。他は斜縄文が施されている。色調は全体的に褐色・赤褐色・明褐色・黒褐色・灰褐色・にぶい黄橙色・にぶい黄褐色・にぶい褐色などを呈し、胎土中には石英粒や砂粒等を多く含むもの

が多く、また、一部には雲母の細片を多く含むものも見られた。

7類土器（第17図7、第23図1～7）

地文に縄文を有し、刻み目のある隆帯文が施されているもので、第23図1は胴部上方、他は胴部の破片と考えられるもので、細い粘土紐を貼り付け、その上から縄文原体を押圧して刻み目としたと思われる。色調は明赤褐色・褐色・黄褐色・明褐色・にぶい褐色・にぶい黄褐色などを呈し、胎土中には石英粒や砂粒等を比較的多く含む。

8類土器（第23図8～28）

地文に縄文を有し、半截竹管による2本単位の平行沈線文が施されている。第23図10～12・28には竹管を押圧した円形の竹管文が見られる。18は口縁部の破片で、口縁部に平行して沈線文が巡り、その下方は斜縄文が施されている。色調は全体的に黒褐色・暗褐色・黄褐色・明褐色・明赤褐色・褐色・灰黄褐色・にぶい黄褐色・にぶい褐色などを呈し、胎土中には石英粒や砂粒等を比較的多く含み、一部には雲母を多く含むものも見られる。

9類土器（第24図1～6）

地文に縄文を有し、隆帯と半截竹管による沈線文が施されているもので、隆帯には半截竹管の連続刺突による刻み目が施されている。また、1の口唇部にも半截竹管の連続刺突による刻み目が見られる。色調は明赤褐色・褐灰色・にぶい赤褐色などを呈し、胎土中には石英粒や砂粒を多く含み、一部には雲母を多く含むものも見られる。

10類土器（第24図7～12）

地文に縄文を有し、押し引きによる連続刺突文が施されているもので、7・8・10・11は口縁部の破片である。11・12には口縁部上端に1条の連続刺突文が施され、その下方に半截竹管による波状の沈線文が見られる。色調は明赤褐色・赤褐色・灰褐色・にぶい赤褐色などを呈し、胎土中には石英粒や砂粒等を多く含み、一部には雲母を比較的多く含むものも見られる。

11類土器（第17図14、第24図13～29・32・35）

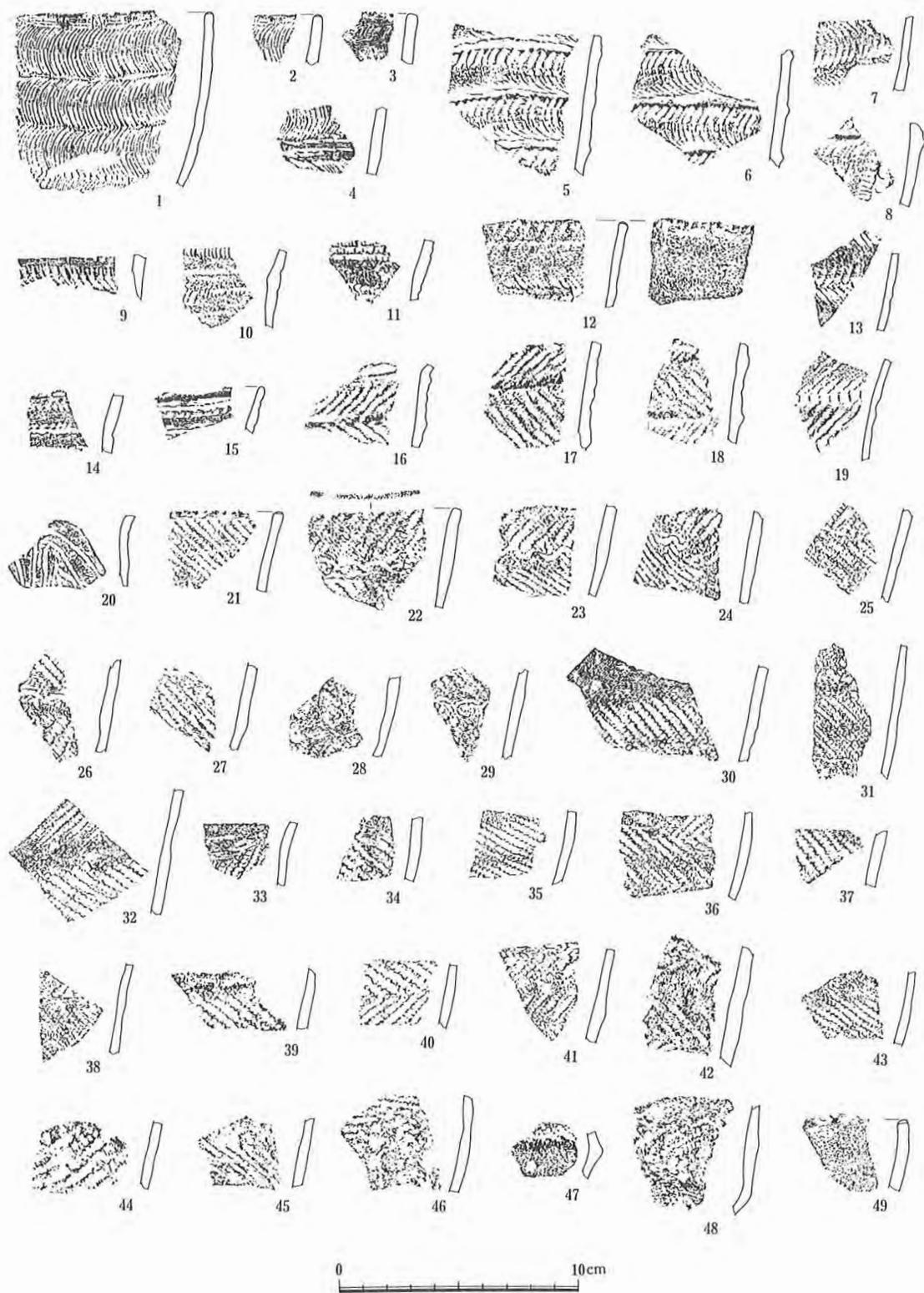
細い半截竹管による波長の長い押し引き文を有するものである。第17図14と第24図13～19・22には口縁部上端に、口縁に沿って1条の押し引き文が見られ、第24図20・21には列点状となる。また、27には列点状の刺突文となっている。この押し引き文以外に殆どのは無文で、28の押し引き文の下方に斜縄文が見られる。色調は、全体的に黒褐色・暗赤褐色・赤褐色・明赤褐色・にぶい赤褐色・にぶい褐色などを呈し、胎土中には石英粒や砂粒等を多く含み、一部には雲母の細片も多く含むものも見られる。

12類土器（第24図30・31）

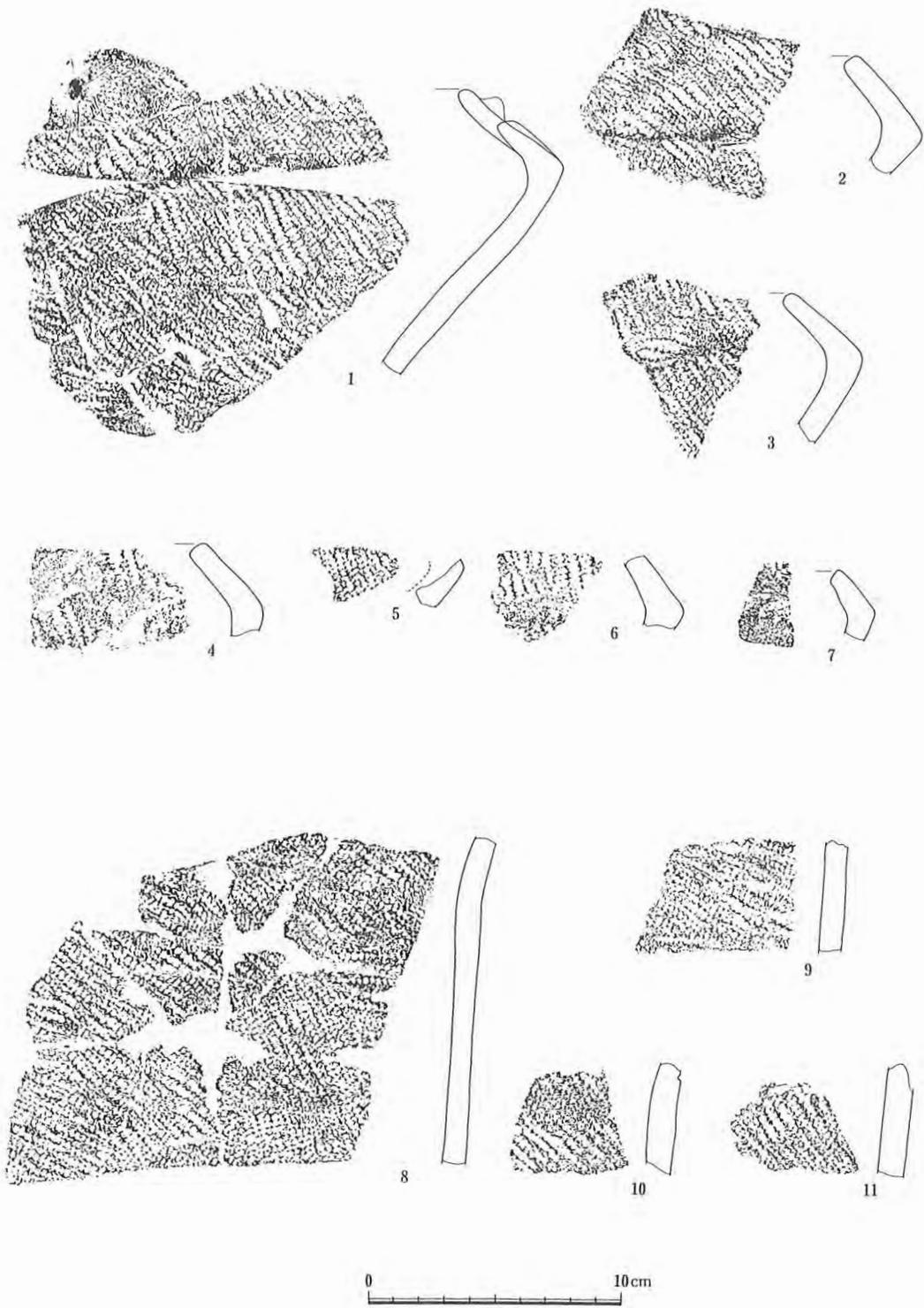
幅の狭い櫛歯状の施文具による列点状刺突文と、同施文具による平行沈線文を有するもので、30は口縁部、31は口縁部下方の破片である。色調は暗赤褐色・灰褐色などを呈し、胎土中には石英粒や砂粒を多く含み、雲母の混入も認められる。

13類土器（第24図33・34）

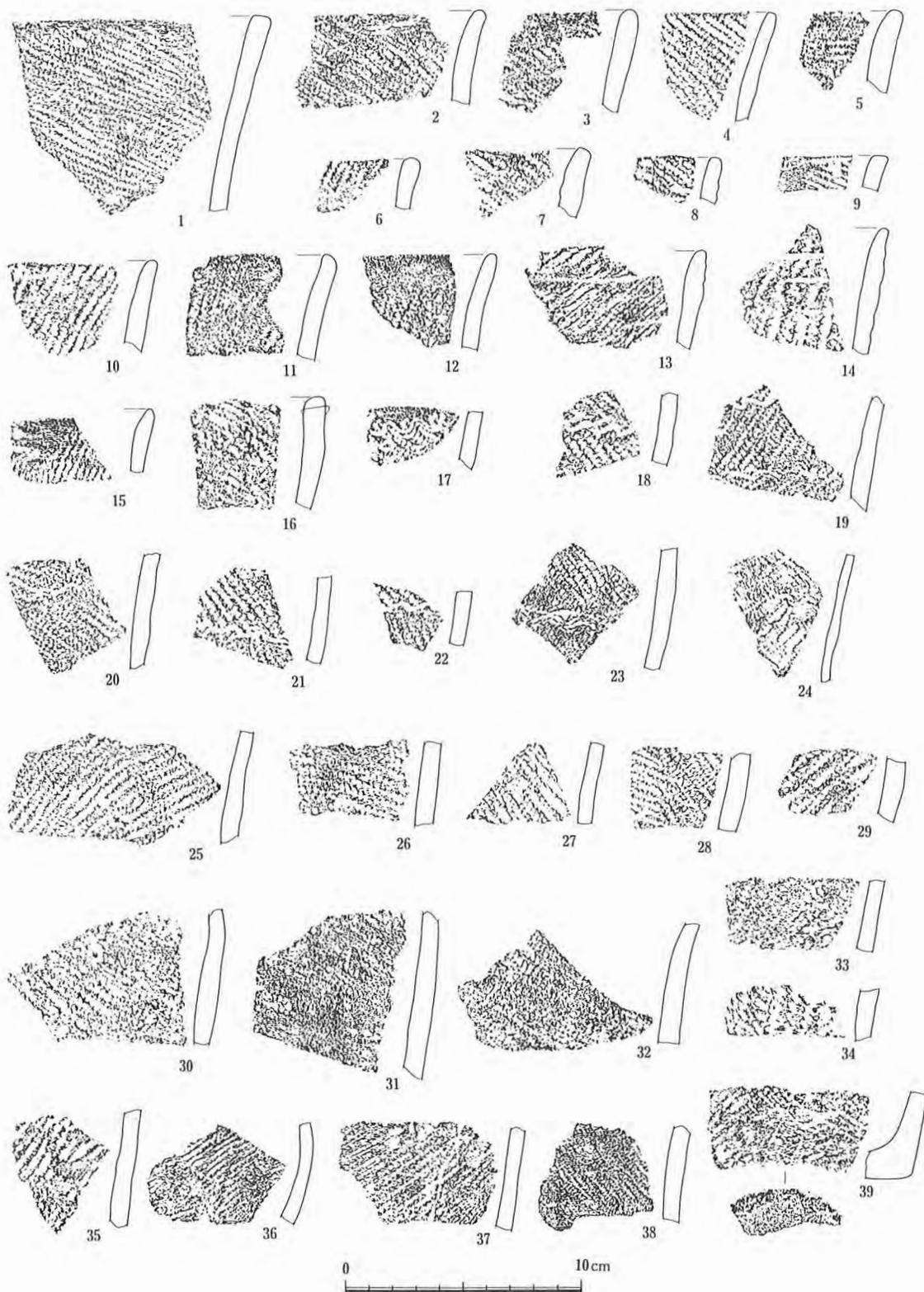
幅の広い半截竹管による連続爪形文を有するもので、34は口縁部の破片である。共に斜行する連続爪形文が平行して施文されている。色調は赤褐色・にぶい褐色を呈し、胎土中には石英粒や砂



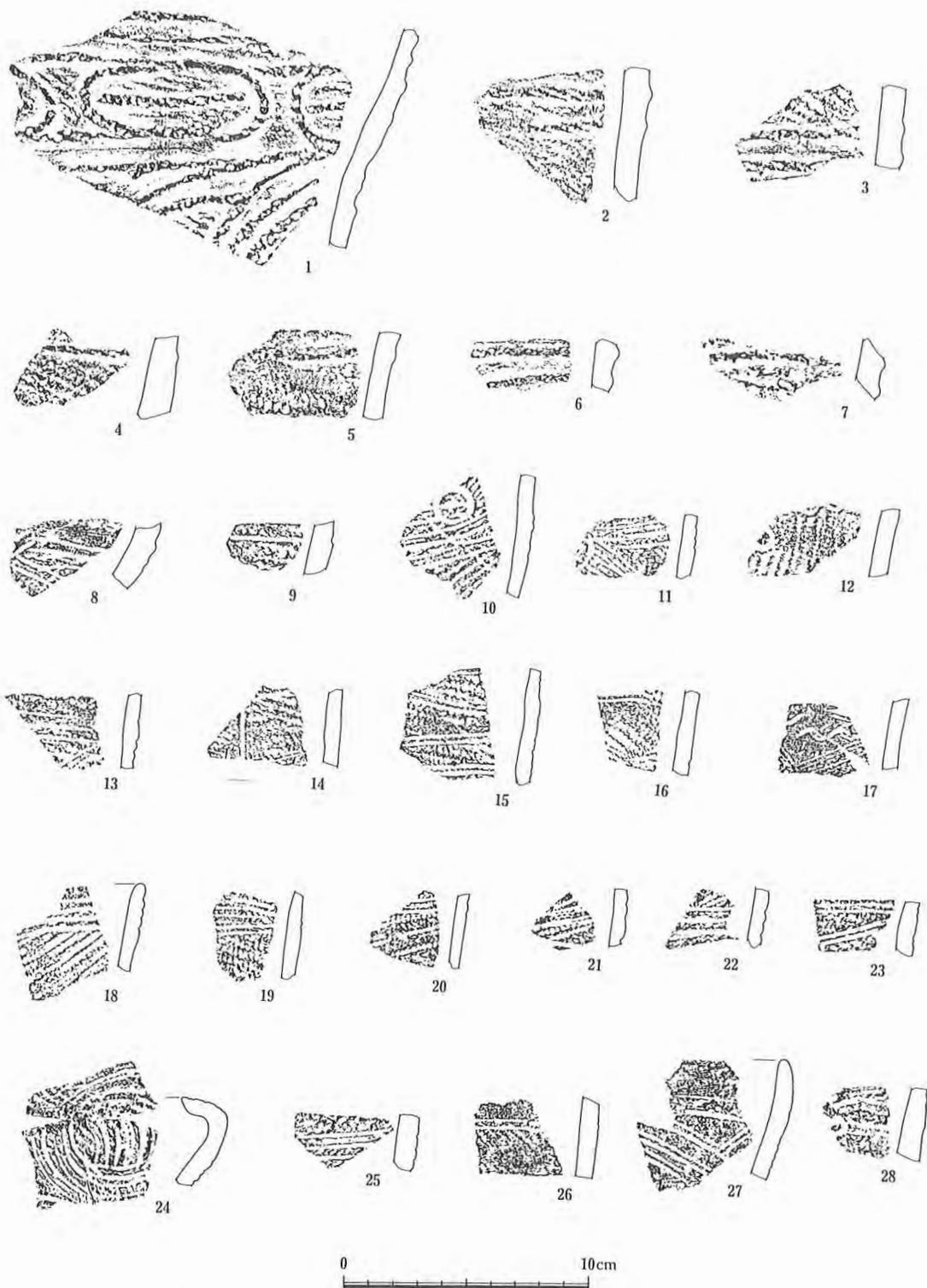
第20图 出土土器拓影图(4)〔1~13. 第Ⅱ群1類土器、14·15. 第Ⅱ群2類土器、20. 第Ⅱ群3類土器、16~19·21~48. 第Ⅱ群4類土器、49. 第Ⅱ群5類土器、(出土地点: 10·18·21·29·42, A-1区、3·8·14~17·19·23~25·27·28·31·32·34~39·43·45·46·48, A-2区、1·2·4·13·20·33·44, B-1区、5~7·9·11·12·22·26·30·40·41·47·49, B-2区、出土層位: 8·17·22·23·31·32·34·38·39·41·46·48. 第4層、1~4·6·7·9~16·18~21·24~30·33·35~37·40·42~44·47·49. 第5層、5·45. 耕作土)〕



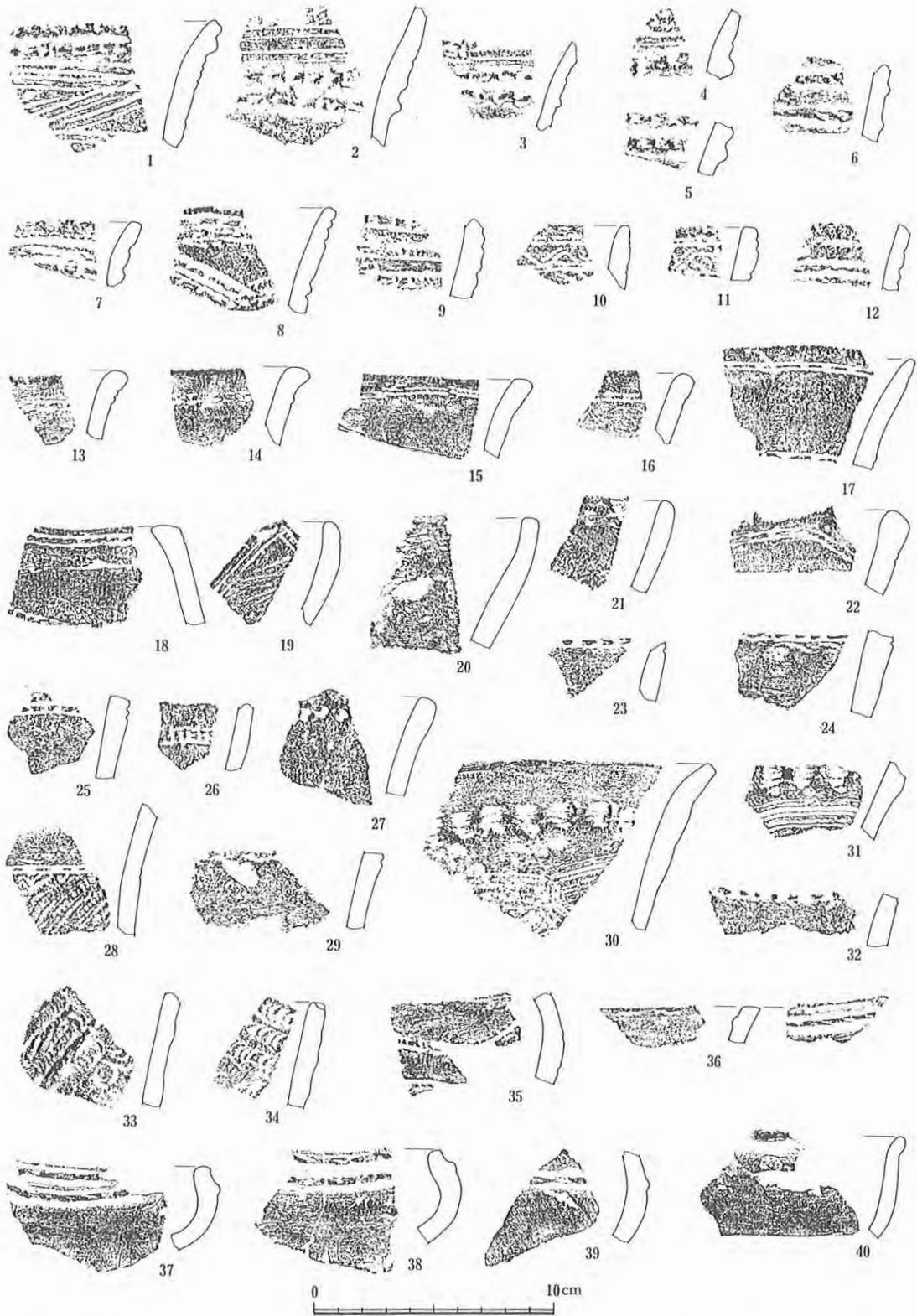
第21図 出土土器拓影図(5) [1~11. 第Ⅱ群6類土器、(出土地点：7. A-1区、8. A-2区、10・11. B-1区、1~6・9. B-2区、出土層位：6・8・9. 第4層、1~5・11. 第5層、7・10. 耕作土)]



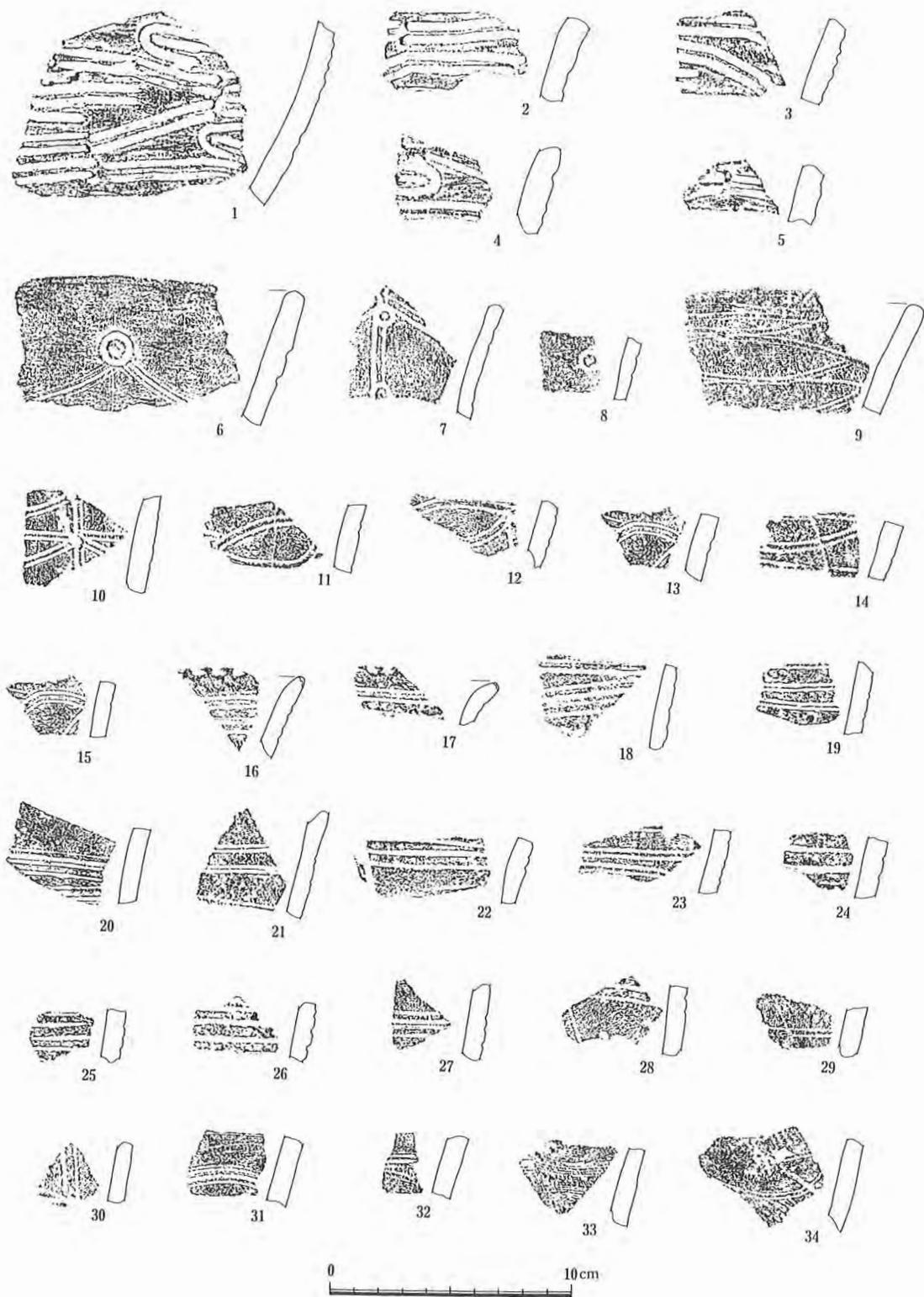
第22图 出土土器拓影图(6) [24. 第Ⅱ群4類土器、1~23・25~39. 第Ⅱ群6類土器、(出土地点：5・10・14・18・23・26・28・36. A-1区、2・8・9・15~17・20・21・24・27・33~35・38・39. A-2区、3・12・19・29・31. B-1区、1・4・6・7・11・13・22・25・30・32・37. B-2区、出土層位：15・16・26・34・35. 第4層、2~7・9~14・17・19~25・29~33・36・36~39. 第5層、1・8・18・27・28. 耕作土)]



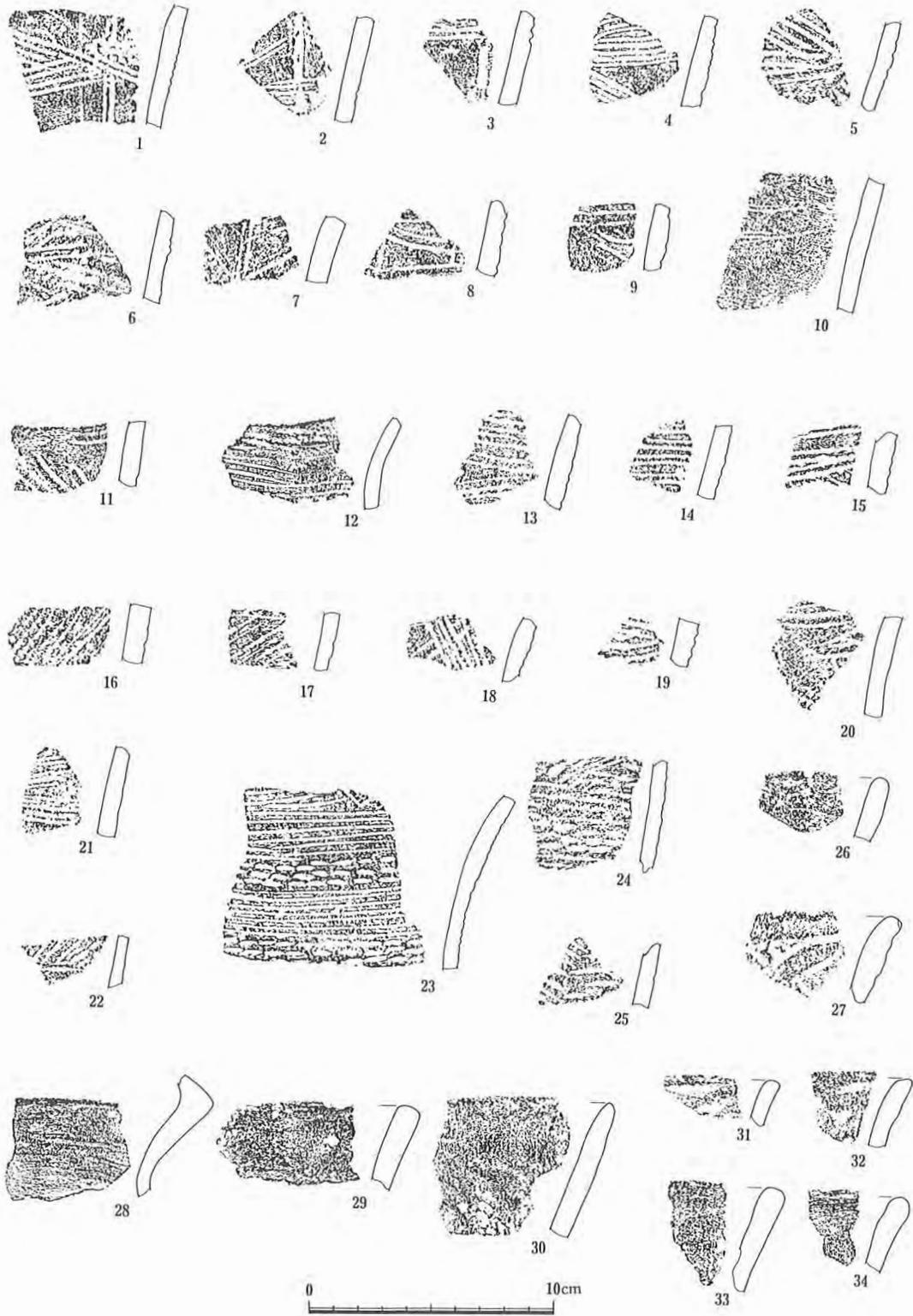
第23图 出土土器拓影图(7)〔1~7. 第Ⅱ群7類土器、8~28. 第Ⅱ群8類土器、(出土地点: 18, A-1区、9·11·13·15·19·21~23·27, A-2区、5·6·8·10·12·14·20·24·25, B-1区、1~4·7·16·17·26·28, B-2区、出土層位: 8·13·19·21. 第4層、1~6·9~12·14~18·20·22·23·25~28, 第5層、7·24. 耕作土)〕



第24图 出土土器拓影图(8) [1~6. 第II群9類土器、7~12. 第II群10類土器、13~29・32・35. 第II群11類土器、30・31. 第II群12類土器、33・34. 第II群13類土器、36~39. 第II群14類土器、40. 第II群17類土器、(出土地点: 22・26・35, A-1区、1~5・8・9・12・18・38~40, A-2区、7・15~17・19・23・25・27・29・33・34・36, B-1区、6・10・11・13・14・21・30~32・37, B-2区、24・28. 第1トレンチ1区、出土層位: 1・3・4・7・8・11・12・18. 第4層、5・6・10・13~16・20~28・30~32・35~40. 第5層、2・9・17・19・29・33・34. 耕作土)]



第25图 出土土器拓影图(9) [1~5, 第II群15类土器、6~34, 第II群16类土器、(出土地点: 11·24·27·28, A-1区、1~3·5·7·9·15~18·23·30·34, A-2区、6·12~14·20·21·31·32, B-1区、4·8·10·19·22·25·26·29·33, B-2区、出土层位: 22~24·34, 第4层、1~10·12~17·19~21·26·28·31~33, 第5层、11·18·25·27·29·30, 耕作土)]



第26图 出土土器拓影图(10) (27. 第Ⅱ群15類土器、1~25. 第2群Ⅱ類土器、26·28~34. 第Ⅱ群17類土器、(出土地点：7·9·16·28·32, A-1区、1·5·6·8·18~21·24~26, A-2区、2·3·15·17·27·29·34, B-1区、4·10~14·22·23·30·31·33, B-2区、出土層位：6·19·21·25. 第4層、1~5·8~13·15~18·20·22~24·27~34. 第5層、7·14·26. 耕作土))

粒・雲母の細片などを比較的多く含む。

14類土器（第24図36～39）

刻み目のある細い隆帯文を有するもので、36は内面に、他は外面に見られる。37と38には口唇部外縁とその直下に口縁に沿って施文されている。色調は灰褐色・赤褐色・にぶい赤褐色などを呈し、胎土中には石英粒や砂粒などを比較的多く含む。

15類土器（第25図1～5、第26図27）

太い沈線文を有するもので、第25図1～5は横方向あるいはやや斜行する沈線文と、折れ曲がる沈線文を主な文様し、第26図27はやや明瞭性を欠くが、浅い直線あるいは弧状を呈する沈線が施文されている。色調はオリーブ黒色・極暗褐色・にぶい黄褐色などを呈し、胎土中には石英粒や砂粒などを多く含む。

16類土器（第25図6～34、第26図1～25）

半截竹管による平行沈線文を有するもので、第25図6～15には弧状の沈線が凸レンズ状などに描かれているもので、6～8には竹管による円形の押圧が見られる。同図16～29は横方向の平行沈線文、31～34は弧状を呈する沈線文、第25図30と第26図1～21は縦・横・斜め方向の沈線文、第26図22～25は平行沈線文と列点状の短い沈線文が見られるもので、色調は褐色・にぶい褐色・明褐色・明赤褐色・にぶい黄褐色・灰黄褐色などを呈し、胎土中には石英粒や砂粒などを多く含み、一部には雲母の細片も多く含むものも見られる。

17類土器（第17図5・15・25、第24図40、第26図26・28～34）

無文のもので、第24図40は口唇部下方でくびれて外側へ突出し、第26図28は口縁部で内折し、同図26・29～34は口縁部は外傾する。色調はオリーブ黒色・黒褐色・にぶい黄褐色・にぶい黄橙色・にぶい褐色などを呈し、胎土中には石英粒や砂粒等を比較的多く含み、一部には微量の雲母片を含むものも見られる。

第2節 石 器

今回の調査で出土した石器類は、先土器時代の剝片と加工痕のある剝片・石核、縄文時代の礫器と打製石斧・石鏃・石匙・削器・石錐・磨石・石皿などであった。その出土層位は先土器時代のものは第7層と第6層で、一部第5層の縄文時代の遺物包含層からも混在していた。縄文時代の石器は第5層で、一部耕作土からも出土した。

A. 先土器時代の石器（第27図・第28図・第30図）

剝片（第27図1・4～10）

1は粗く調整された打面から剝離された剝片で、表面には同一方向から剝離された小さな剝離痕と方向を異にする剝離痕が見られ、先端部を斜めに欠損している。現長3.2cm、最大幅2.5cm、器厚0.9cmを計る。石材は緻密黒色安山岩を用いており、第7層から出土した。第7層からはこの剝片以外に遺物は出土しなかった。

4・6～10は第5層から出土した剝片で、4は剝片の先端部を欠損し、表面には1条の稜を有する。現長2.2cm、最大幅4.2cm、器厚0.4cmを計る。石材は頁岩を用いており器面の風化が著しい。

6は粗く調整された打面を有する剥片で、表面には2条の稜が見られる。全長4.8cm、最大幅3.7cm、器厚1.1cmを計り、石材は緻密黒色安山岩を用いている。7は剥離方向が一定しない剥片で、全長10.4cm、最大幅7.3cm、器厚1.5cmを測る。石材は頁岩を用いており、器面の風化が著しい。8は円礫から石核を製作する際に生じた剥片で、片面に大きく礫面を残存する。全長5.9cm、最大幅4.5cm、器厚1.3cmを計り、石材は頁岩を用いている。9は石核の調整の際に生じたと思われる剥片で、全長10.0cm、最大幅4.9cm、器厚2.4cmを計り、石材は頁岩を用いている。10は8と同様に石核を製作した際に生じたと思われる剥片で、片面に大きく礫面を残存する。全長6.9cm、最大幅3.0cm、器厚1.7cmを計り、石材は頁岩を用いており、器面は風化が著しい。

5は第4集石土壌内から出土した縦長の剥片で、先土器時代のものが混入したと思われる。表面には2条の稜を有し、全長9.0cm、最大幅2.6cm、器厚0.4cmを計る。石材は頁岩を用いており、器面は風化をうけている。

加工痕のある剥片（第27図2・3）

2は、薄く基部を欠損した剥片の側縁部に、片側より細部加工を施したもので、一種の搔器かと思われる。全長3.9cm、最大幅3.2cm、器厚0.4cmを計り、石材は頁岩を用いており、器面全体に風化を著しく受けている。

3はやや縦長の剥片の両側縁部と先端部に細かな細部加工が施されたもので、ナイフ形石器の一種かも知れない。全長5.5cm、最大幅2.8cm、器厚0.9cmを計り、石材は夾雑物を含まない良質の黒耀石を用いている。

石核（第28図2）

2は残核で、剥片剥離が核の中央部まで及ばず、この部分が厚くなって抵抗となり、剥片を剥離することが出来なくなって放棄されたものと思われる。打面は調整されず、礫の自然面をそのまま使用している。片面は礫の自然面をそのまま残し、他の片面に剥片剥離が施され、同一方向の剥離面が3面認められる。全長10.3cm、最大幅5.9cm、器厚2.9cmを計り、石材は頁岩を用いているが、器面は風化が著しい。

磨石（第30図13・15）

第6層より磨石が2点出土している。出土層位から先土器時代のものであると思われる。13は長径10.5cm、短径8.3cm、器厚5.4cmを計り、ほぼ楕円形を呈する。15は長径8.7cm、短径6.9cm、器厚6.5cmを計り、楕円形に近い形状を呈する。共に周縁部の一部には敲いた痕跡が認められる。

B. 縄文時代の石器（第27図～第30図）

礫器（第27図11・12、第28図1）

第27図11・12は、円礫の周縁部に打撃を加え、主に片面に剥離を施したものである。共に片面には礫の自然面を残し、他の片面の周縁には剥離痕が認められる。11は全長8.9cm、最大幅6.6cm、器厚2.9cm。12は全長10.5cm、最大幅7.6cm、器厚4.4cmをそれぞれ計り、両者共に石材は頁岩を用いている。また、11は石器の素材を成作する際の石核かも知れないが、ここでは礫器として扱った。

第28図1は、扁平な板状の剥片の周縁部に比較的粗い調整加工を施したもので、頭部を欠損しているものと思われる。現長9.8cm、最大幅12.1cm、器厚3.4cmを計り、石材は硅質分の多い頁岩

と思われる。

打製石斧（第28図4）

短冊形を呈する打製石斧で、比較的薄い剥片の周縁部に主に調整加工を施したもので、片面には自然面を大きく残し、他の片面は第1剥離面を大きく残存する。また、中央よりやや上方の両側縁部にくびれを有する。全長10.2cm、最大幅4.2cm、器厚1.3cmを計り、石材は硬質砂岩を用いている。B-1区の第5層から出土した。

削器（第28図5）

薄い板状を呈する剥片の一侧縁部に、主に片側へ細部加工を施したもので、刃部は片刃となる。全長5.5cm、最大幅8.0cm、器厚1.1cmを計り、石材は硅質頁岩を用いている。

尖頭器様石器（第28図6）

横長の剥片の周縁部のみに細部加工を施し、一端部を尖らせて木葉形の尖頭器の様に整形を施したもので、基部側には細部加工が施されていない。全長6.5cm、最大幅3.9cm、器厚1.0cmを計り、石材は硅質頁岩を用いている。A-1区の第6層に近い第5層下部より出土した。

石錐（第28図7）

剥片の先端部に細部加工を施して細く尖らせたもので、この部分を錐部としている。他の部分は加工を施さずに剥片のままとしている。全長6.6cm、最大幅3.9cm、器厚0.9cmで、錐部は全長1.7cm、幅6～1.3cm、器厚0.4cmを計り、その断面形は凸レンズ状を呈する。石材は頁岩を用いており、器面全体に風化が著しい。

石鏃（第29図1～28）

石鏃は未完成品を含めて31点出土した。すべて無茎の石鏃で、その形状から4種に細分される。二等辺三角形を基本形として、底辺が若干内彎するものをa種、底辺の中央部が内彎するものをb種、底辺が全体的に大きく内彎し、脚部を形成するものをc種、底辺が若干張り出すものをd種に分けられる。

a種（第29図17～23・25・28） 二等辺三角形の底辺が若干内彎するもので、17・18のように短い脚部を形成するものと19～23・25・28のように脚部を殆ど形成しないものが見られる。また、28は未完成品と思われる。石材は19が頁岩、25が粗質のチャートと思われ、他は黒耀石を用いている。

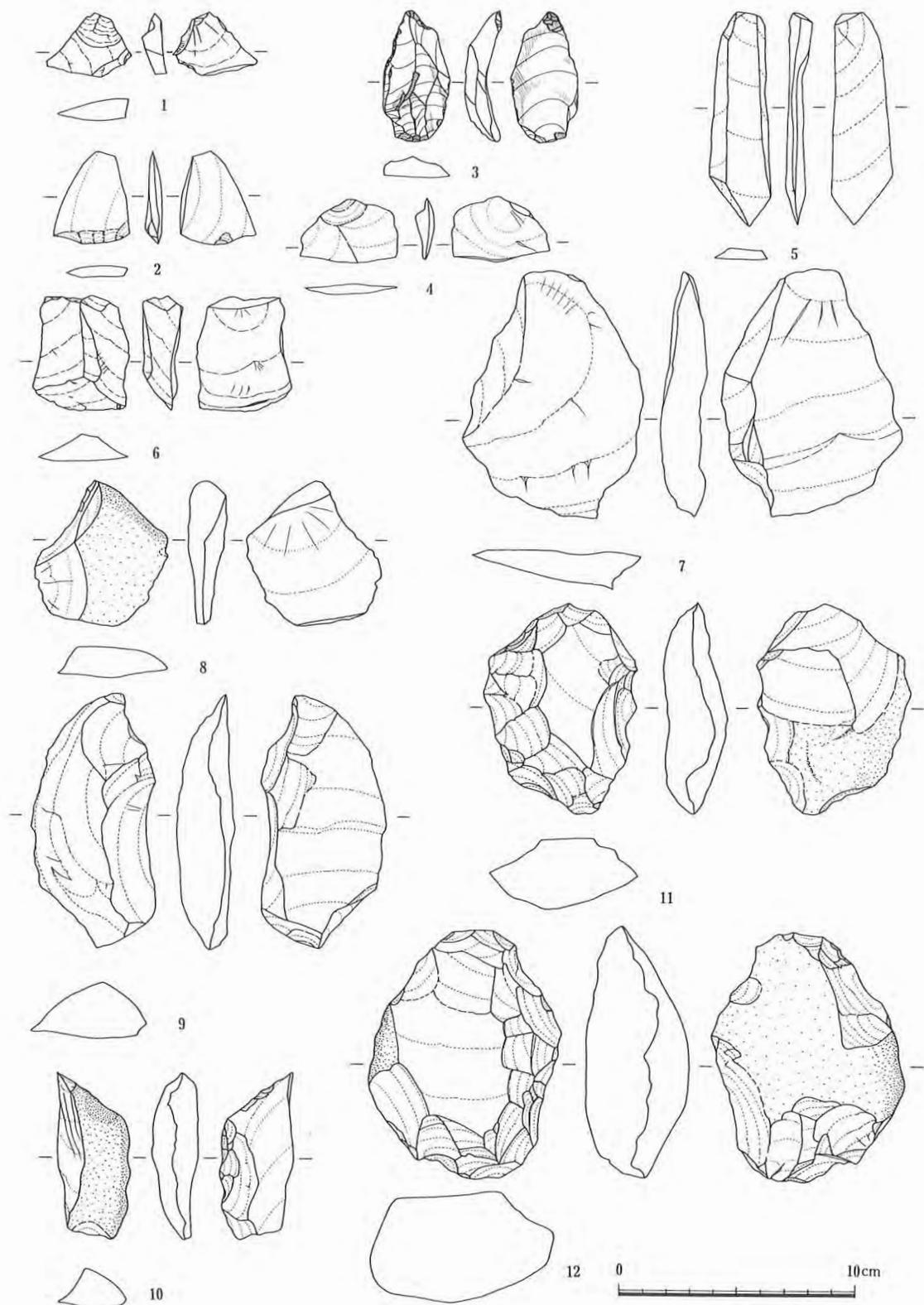
b種（第29図1～10・27） 二等辺三角形の底辺の中央部が内彎するもので、短い脚部を形成し、脚部の先端は尖らず角頭状あるいは円頭状を呈する。9・10は未完成品と思われ、石材は2が硅質頁岩、他は黒耀石を用いている。

c種（第29図11～16・24） 底辺が大きく内彎し、長い脚部を形成するもので、脚部の先端は尖頭状あるいは円頭状を呈する。石材は15が頁岩、他は黒耀石を用いている。

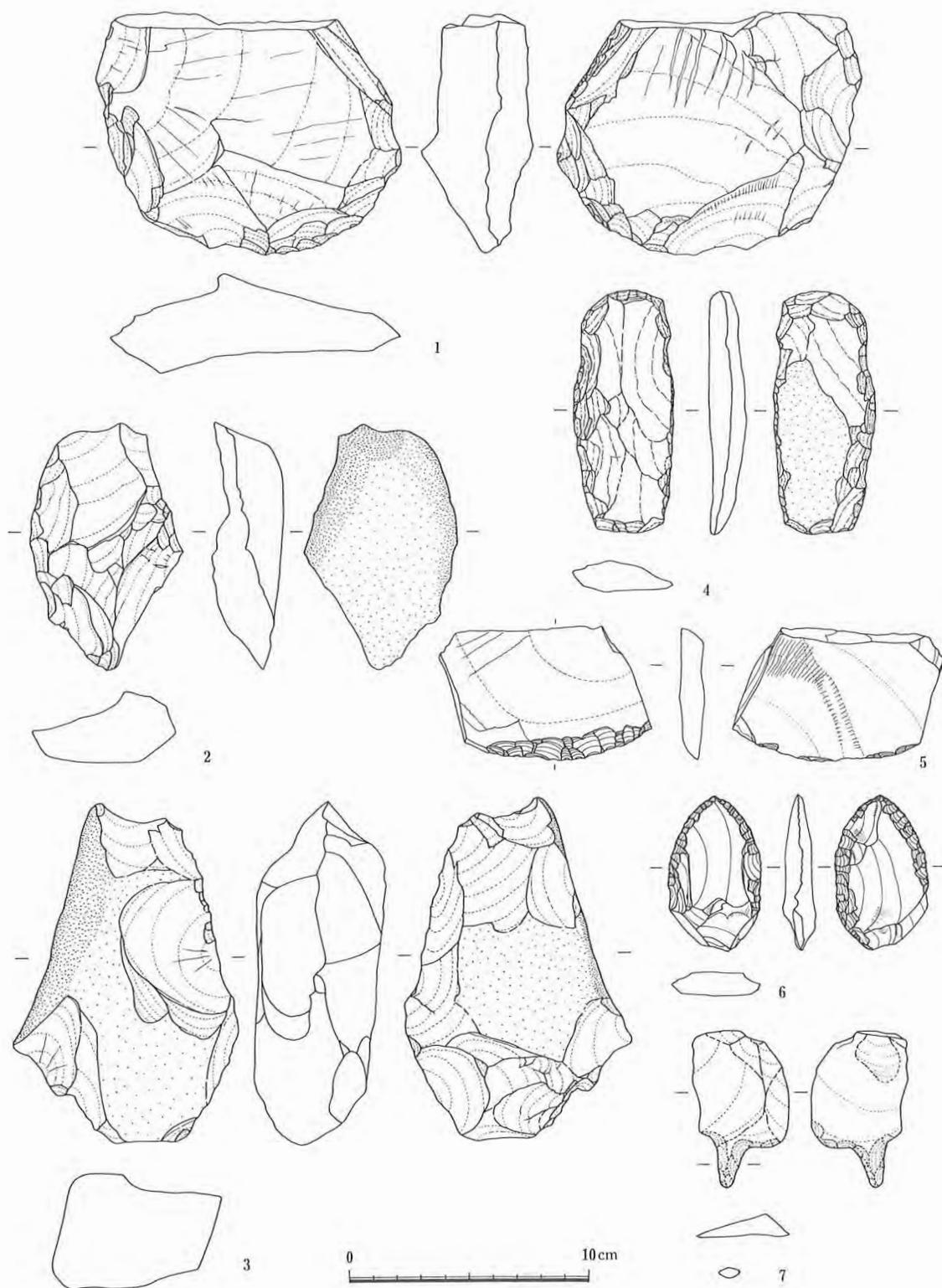
d種（第29図26） 底辺が若干張り出すもので、石材は頁岩を用いており、器面は風化を著しく受けて細部加工の痕跡は明瞭性を欠く。

石匙（第30図1～9）

横型の石匙で、刃部の角度からa・bの2種に分けられる。



第27図 出土石器実測図(1)〔1・4～10. 剥片、2・3. 加工痕のある剥片、11・12. 礫器、(出土地点：1・8～10. 第2トレンチ1区、2. 第1トレンチ2区、3・6・11. A-1区、4. B-2区、5. 第4集石土壌、7・12. B-1区、出土層位：1. 第7層、2・4・6～10. 第6層、3・11・12. 第5層、5. 第4集石土壌覆土)〕



第28図 出土石器実測図(2)〔1. 礫器、2・3. 石核、4. 打製石斧、5. 削器、6. 尖頭器様石器、7. 石錐、(出土地点：1・4. B-1区、2. 第1トレンチ2区、3. 第2集石土塙、5. B-2区、6. A-1区、7. A-2区、出土層位：2. 第6層、4~7. 第5層、1. 耕作土、3. 第2集石土塙覆土)〕

a種（第30図1～3） 刃部が厚く、その角度が鈍角のもので、三者共に比較的薄い剥片の周縁部に細部加工を施して整形し、刃部は片面より調整が行われている。1は片方の端部を欠損しており、現長5.2cm、最大幅2.5cm、器厚0.5cmを計り、刃部の角度は約62°を示す。石材は頁岩を用いている。2は全長6.0cm、最大幅3.3cm、器厚0.5cmを計り、刃部の角度は約60°を示す。石材は頁岩を用いている。3は全長4.1cm、最大幅2.4cm、器厚0.5cmを計り、刃部の角度は約54°を示す。石材は頁岩を用いており、1・2と同様に風化が著しい。また、6は刃部を欠損しているものであるが、この種に属すると思われる。

b種（第30図4・5・7～9） 刃部は薄く、その角度が鋭角のもので、比較的薄い剥片を素材として、一辺の鋭い側縁部をそのまま刃部とし、他の部分に細部加工を施して整形して石匙としたものである。4は全長4.9cm、最大幅3.1cm、器厚0.9cmを計り、刃部の角度は約18°を示す。5は全長5.6cm、最大幅4.0cm、器厚0.7cmを計り、刃部の角度は約17°を示す。7は未完成品と思われるもので、薄い剥片の一部に僅かな細部加工を施してつまみの部分を形成しているが、他の部分は調整は施されていない。全長4.1cm、最大幅2.6cm、器厚0.3cmを計り、刃部の角度は約18°を示す。8は一部を欠損しているもので、現長3.4cm、最大幅3.4cm、器厚0.6cmを計り、刃部の角度は約16°を示す。9は他に比較してやや大型のもので、刃部は直線状でなく張り出すように弧状を描き、片面より細かな細部加工が施されて整形されており、両端部を欠損している。現長6.2cm、最大幅4.9cm、器厚0.8cmを計り、刃部の角度は約46°を示す。石材はすべて頁岩を用いており、器面は著しく風化を受けている。

磨石（第30図10～12・14・16～19）

円形あるいは楕円形を呈するものをa種、棒状のものをb種の2種に分けられる。

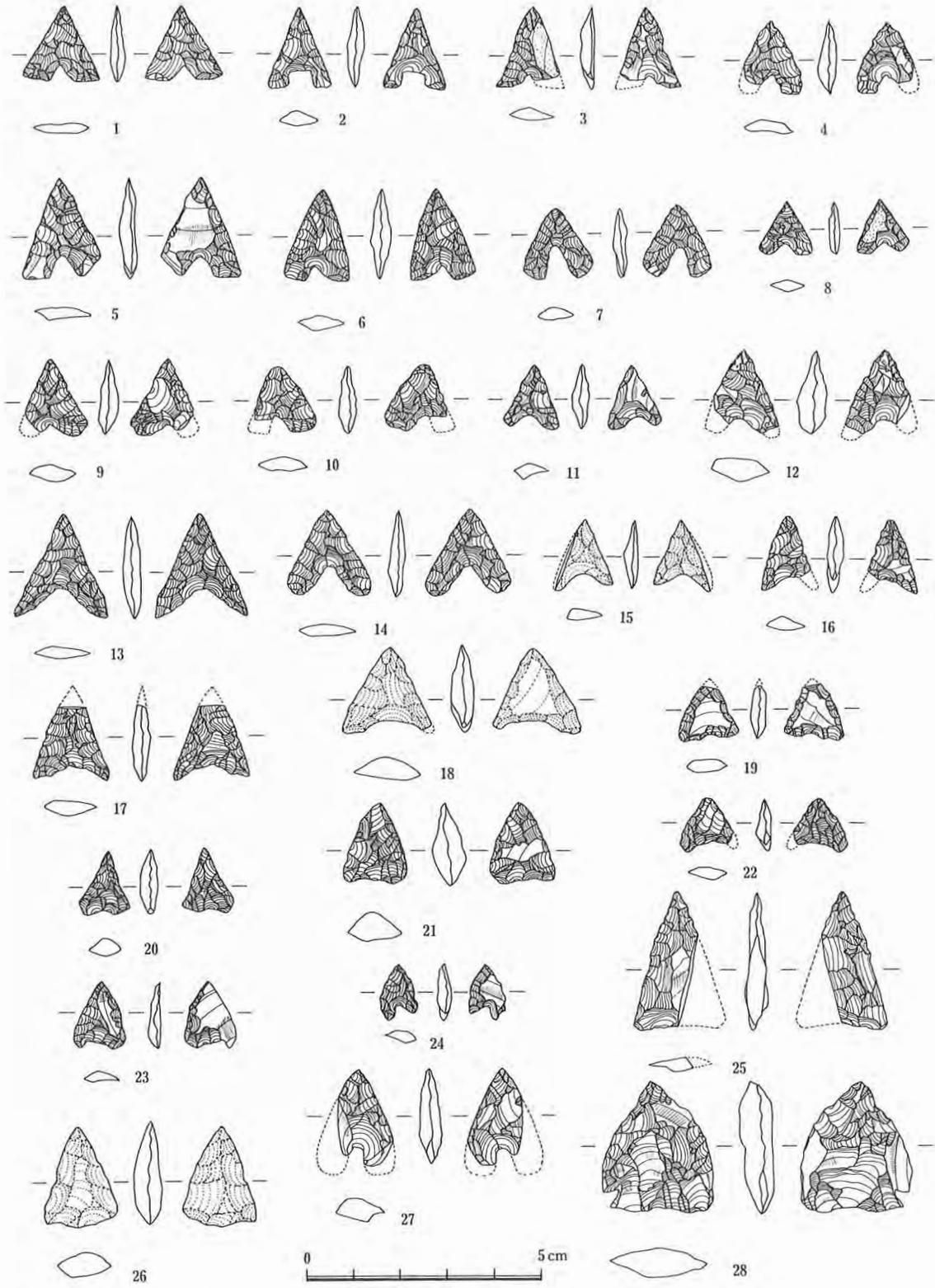
a種（第30図10～12・14・16～18） すべて両面あるいは片面に凹みもなく、周縁部にも稜を有しないもので、10は長径12.1cm、短径11.2cm、器厚5.7cmを計り、円形に近い形状を呈し、片面には表面が剥落した痕跡が見られる。11は長径12.5cm、短径10.5cm、器厚6.1cmを計り、ほぼ楕円形を呈する。12は長径9.9cm、短径8.5cm、器厚4.3cmを計り、円形に近い形状を呈する。14は長径9.8cm、短径9.4cm、器厚4.2cmを計り、ほぼ円形に近い形状を呈し、器面の一部には火を受けて変色している。16～18は一部を欠損しており、16はほぼ楕円形、17は長楕円形に近い形状を、18は円形に近い形状をそれぞれ呈すると思われる。

石皿（第30図20～22）

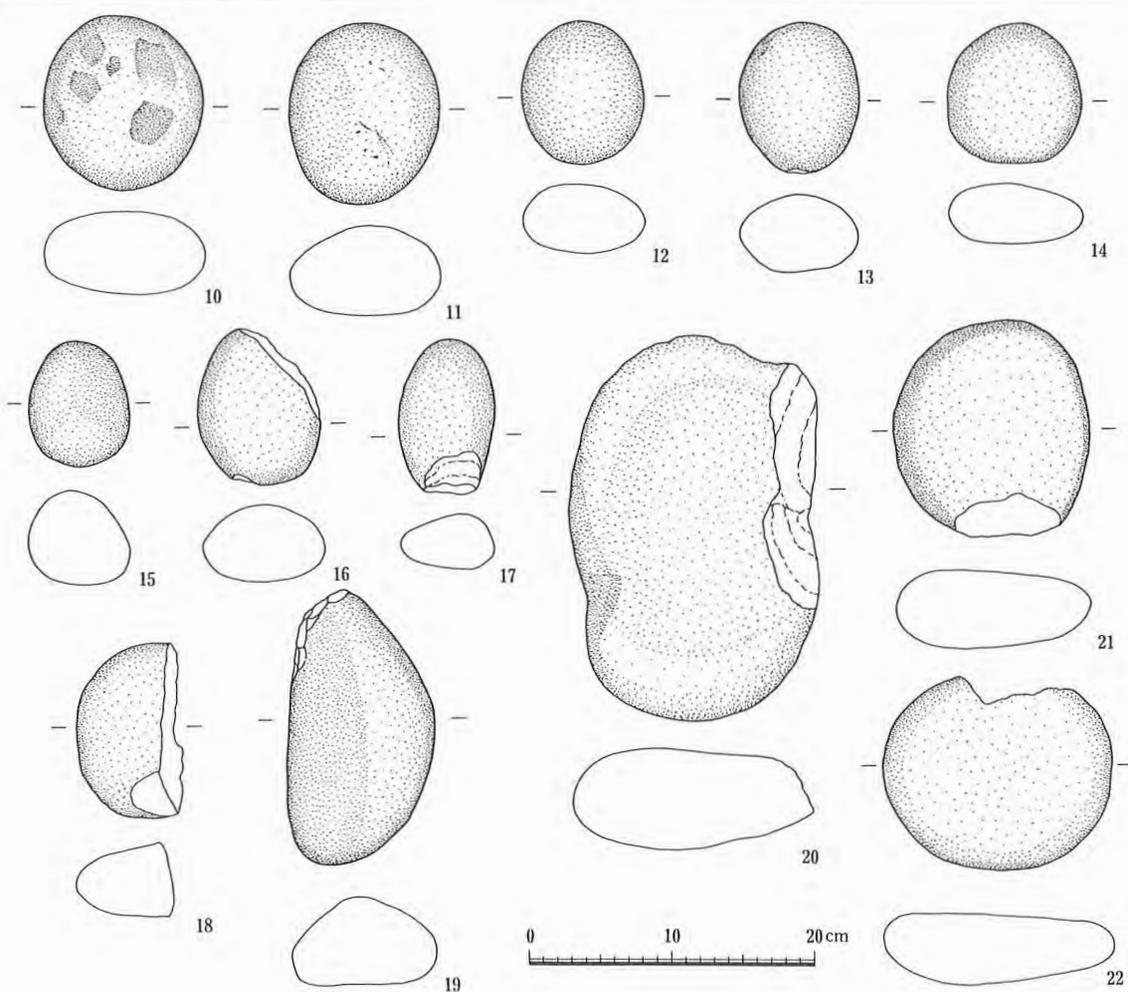
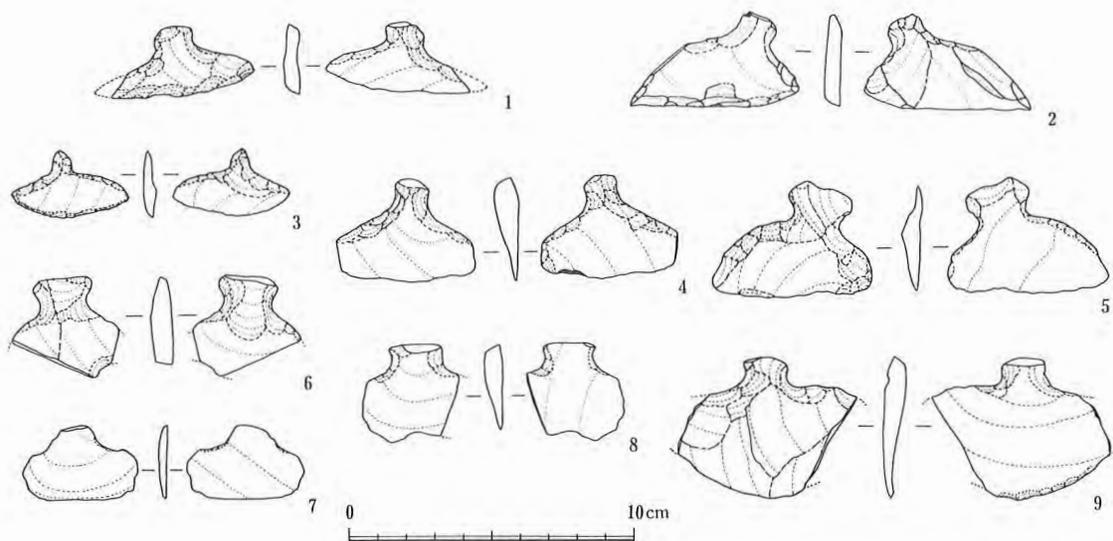
20は偏平な河原石を利用して片面を使用し、中央部が若干窪んでいる。また、片方の側縁部を一部欠損している。長径26.7cm、短径16.5cm、器厚7.2cmを計る。21・22共に一部欠損しているが、円形に近い形状を呈し、片面は平坦となっている。21の器面は風化を著しく受けて粗面となっており、長径14.4cm、短径13.6cm、22は長径16.1cmをそれぞれ計る。

石核（第28図3）

石器の素材を得る目的で礫の側縁より打撃を加えて剥片を剥離し、何かしらの原因で放棄されたものと考えられる石核で、全長14.1cm、最大幅9.4cm、器厚4.8cmを計る。石材は硅質分がやや多い頁岩を用いて入る。



第29图 出土石器实测图(3)〔1~28.石鏃、(出土地点:1~3·6·7,B-2区、4·8·9·20·22·27, A-1区、5·13·15·17,B-1区、10~12·19·23·24,A-2区、14·21·26·28,B-2区、16·18·25.第4集石土坑、出土层位:12.第6层、1~6·8~11·13~15·17·19~23·26~28.第5层、7·24.耕作土、16·18·25.第4集石土坑覆土)〕



第30図 出土石器実測図(4)〔1~9. 石匙、10~19. 磨石、20~22. 石皿、(出土地点：1・3・4・8・19・20, A-2区、2・5・6・9・11・12・22, B-2区、10・16・18, A-1区、13, B-1区、14. 第2集石土壌、7. 第3集石土壌、17. 第4集石土壌、21. 第5集石土壌、15. 第1トレンチ2区、出土層位：13・15. 第6層、1・2・4~6・8~12・16・18~20・22, 第5層、3. 耕作土、14. 第2集石土壌覆土、7. 第3集石土壌覆土、17. 第4集石土壌覆土、21. 第5集石土壌覆土)〕

第6章 考察

第1節 遺構に関する考察

第5次調査では集石土壙6基と焼土2基が発見された。集石土壙内には第4層と考えられる黒色土あるいは黒褐色土の堆積が見られた。このことは第3次調査の時に発見された住居址の覆土と同様で、住居址内から出土した遺物よりその時期は縄文時代前期であった。今回発見された集石土壙内から出土した遺物は少量で、縄文時代の早期や前期の土器が混在しており、中には早期の土器片のみが出土した集石土壙もあったが、これらの集石土壙は同一時期に構築され、その時期は縄文時代前期と考えられる。

この集石土壙の規模は、第1集石土壙が1.06×0.79m、第2集石土壙が1.05×0.83m、第3集石土壙が0.63×0.61m、第4集石土壙が1.48×0.88m、第5集石土壙が0.84×0.58mであった。第6集石土壙はその大半がトレンチに削られて規模は不明である。これより長径が1.5～1.0m、短径が0.9～0.8m前後のもの、長径が0.8～0.6m、短径が0.6m前後のものに2つのタイプに分けられる。この集石土壙が土壙墓と断定はできないが、静岡県東部における唯一の人骨を伴う集石土壙墓が発見された賀茂郡西伊豆町築地遺跡（注1）の例を見ると、その規模は長径が約1.44m、短径が1.02mの仰臥屈葬で、その時期は縄文時代中期中葉であった。今回の調査で発見された集石土壙と時期的には異なるが、大きなタイプの集石土壙の規模とよく似ており、このことから集石土壙墓の可能性が高いといえよう。

第2節 遺物に関する考察

今回の調査で出土した遺物は、第5章に述べたように、先土器時代の遺物と縄文時代の遺物に大別される。先土器時代の遺物には剥片や石核・磨石などが出土し、縄文時代の遺物には早期・前期の土器片の他、礫器や打製石斧・削器・尖頭器様石器・石錐・石鏃・石匙・磨石・石皿などが出土した。

A. 先土器時代の遺物について

先土器時代の遺物は、今回の調査で出土した遺物全体から見ると、その出土量は少量であった。出土地点は調査区の北側に多く見られ、出土層位は休場層に対比される第6層と、その下層の第7層であった。

第7層から出土した遺物は剥片1点のみであったが、第3次調査の時には確認され、剥片などが出土した。この文化層から出土した遺物の石材は、緻密黒色安山岩や質の悪い黒耀石と頁岩などで、上層の第6層の石材は頁岩と良質の黒耀石が主体であり、石材に差異が見られた。この第7層は第6層に比べて黒味を有する暗褐色土で、愛鷹及び箱根山麓に見られるどの黒色帯に対比できるか今後の課題である。この土層より出土した遺物は剥片のみで、どのような石器を伴うかは今後の調査を待たなければならない。また、第6層の黄褐色ローム層からも、まとまった状態で遺物は検出され

ず、出土量も少なかった。遺物は調査区の北側から主に出土し、先土器時代の遺物分布の南限と考えられる。従って、先土器時代の遺跡の主体部は、今回の調査地点の北側にあると思われる。

B. 縄文時代の遺物について

出土した土器は、第5章第1節で述べたように縄文時代早期の土器（第Ⅰ群土器）と前期の土器（第Ⅱ群土器）であった。これらの土器の型式を掲示してみると、次のようになる。

第Ⅰ群1類土器は楕円押型文土器で、a種は薄手のもの、b・c種は厚手で粒子が粗大なもので、後者は高山寺式類似あるいは併行するもの、前者はそれ以前のものと思われる。また、2類の撚糸文土器も厚手で密接して施文されていることなどから、高山寺式に併行するものと思われる。3類の条痕系土器は鶴ヶ島台式に比定され、4類の沈線文を有する土器は田戸上層式に併行するものと思われる。5類の土器は粕畑式に比定され、6類は3類あるいは5類の胴部下半のもの、7類は茅山上層式併行、8類の無文土器は7類に伴出するものとそれぞれ考えられる。

前期の第Ⅱ群土器は、1類から5類の薄手の土器と6類から17類の厚手の土器とに大別される。前者は北白川下層Ⅱ式に類似あるいはそれに比定されるものと考えられ、後者は第16類の筋骨文・対角文は諸磯a式、第7・第8類は諸磯b式に比定されるもので、他は諸磯a式あるいは諸磯b式に併行するものと考えられる。

出土した石器類は礫器3点と打製石斧・削器・尖頭器様石器・石錐各1点及び石鏃30点・石匙9点・磨石8点・石皿3点であった。この内、尖頭器様石器は第5層最下部より出土し、第3次調査の時に確認された縄文時代草創期の出土層位とほぼ同じことより、同時期の所産かも知れない。また、今回の調査でも打製石斧が1点・磨製石斧は皆無で、石鏃と石匙が多く出土している点第3次調査などと共通しており、狩猟主体の生活であったことを想定させられる。

注1. 西伊豆町教育委員会・加藤学園考古学研究所『西伊豆築地遺跡』1991年。

第7章 結 語

今回の第5次調査までの検出された遺構を見ると、第1次調査では先土器時代の遺物集中域が発見され（注1）、第2次調査では小範囲ではあったが、縄文時代早期の石器製造址と思われる遺物の分布が確認された（注2）。第3次調査では縄文時代早期と考えられる陥穴1基と縄文時代前期の住居址2軒及び縄文時代草創期の石器製造址が発見された（注3）。第4次調査では縄文時代前期と思われる小配石1基が確認された。今回の第5次調査では集石土壌6基と焼土2基が新たに発見された。この様に調査の回数を重ねる毎に新たな遺構が発見され、次第に遺跡の性格が明らかになってきた意義は大きいと評価されるであろう。

終わりに調査にあたり芝川町教育委員会と地主をはじめ調査に参加された方々に対して心より感謝申し上げる次第である。

注1. 芝川町教育委員会『駿河小塚』1972年。

2. 芝川町教育委員会『（駿河）小塚遺跡第2次調査報告書』1981年。

3. 秋本眞澄「芝川町小塚遺跡第3次発掘調査略報」『駿豆考古』第26号1993年。

報 告 書 抄 録

ふりがな	こづかいせき							
書名	小塚遺跡							
副書名	個人住宅建設に伴う第5次調査							
編著者名	秋本真澄							
編集機関	芝川町教育委員会							
所在地	〒419-03 静岡県富士郡芝川町長貫1131-6				TEL 0544-65-1111			
発行年月日	平成7年3月25日 (1995年3月25日)							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こづかい 小塚遺跡	ふじぐん 富士郡	22361	01-015	35° 13' 0"	138° 34' 29"	第1次調査 19710809 19710827	496㎡	農免道路建設に伴う事前調査。
	しばわちよう 芝川町					第2次調査 19810524 19810531	121㎡	工場建設に伴う事前調査。
						第3次調査 19920523 19920914	1,820㎡	倉庫建設に伴う事前調査。
	にしやまあざ 西山字					第4次調査 19920918 19921007	135㎡	町道整備に伴う事前調査。
						こづかい 小塚	第5次調査 19940801 19940908	229㎡
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
小塚遺跡	散布地	先土器時代 縄文時代	集石土壇 6基	剥片・石核・磨石 縄文土器・礫器・尖頭器 様石器・削器・打製石斧 ・石鏃・石匙・石錐・磨石・石皿	縄文時代前期の集石土壇 6基を確認			

小 塚 遺 跡

—個人住宅建設に伴う埋蔵文化財第5次調査報告書—

平成7年3月20日 印刷
 平成7年3月25日 発行
 編集/芝川町教育委員会
 発行/芝川町教育委員会
 静岡県富士郡芝川町長貫1131-6
 TEL (0544) 65-1111
 印刷/みどり美術印刷株式会社
 沼津市沼北町2丁目16-19

版 圖

図版1 調査終了時の状態



第5層（縄文時代遺物包含層）までの状態



第6層以下の試掘の状態

図版2 土 層



第1トレンチ1区西壁

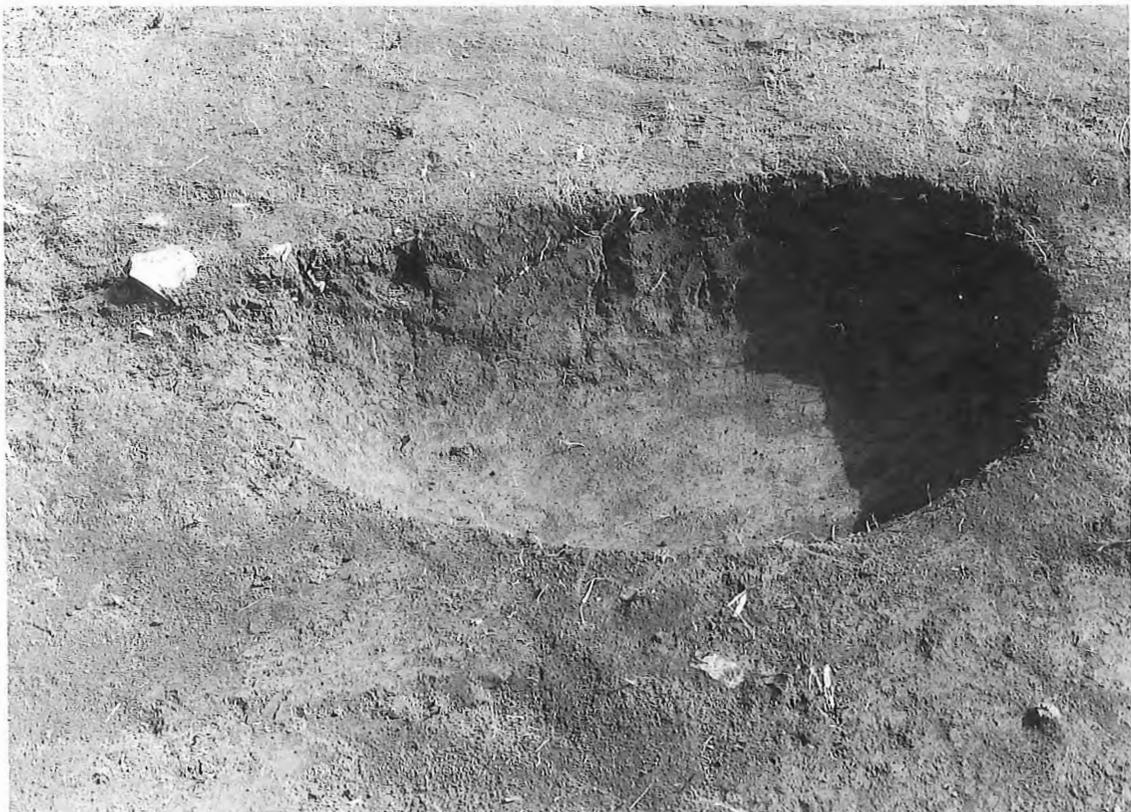


第2トレンチ2区北壁

図版3 遺構【1】



第1集石土塙

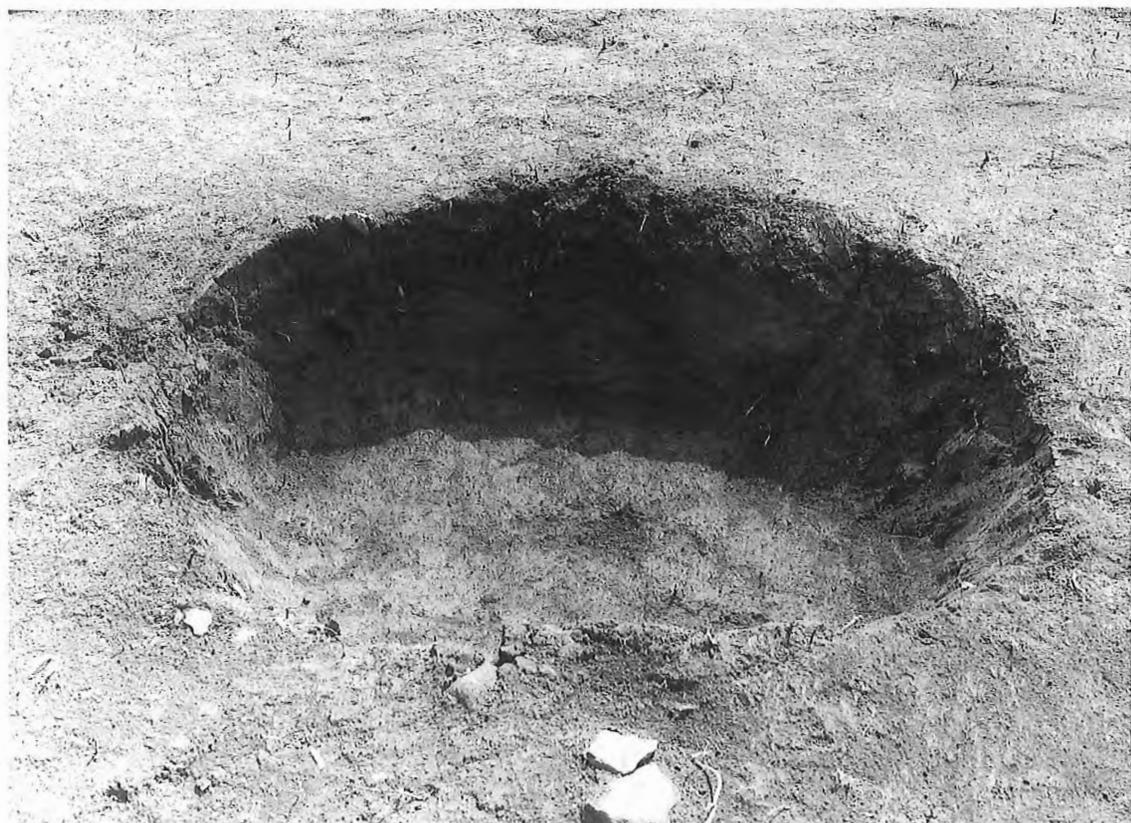


第1集石土塙（完掘時）

図版4 遺構【2】



第2集石土坑



第2集石土坑（完掘時）

図版5 遺構【3】



第1・第2集石土城



第1・第2集石土城（完掘時）

図版6 遺 構【4】



第3集石土壇



第3集石土壇（完掘時）

図版7 遺 構【5】

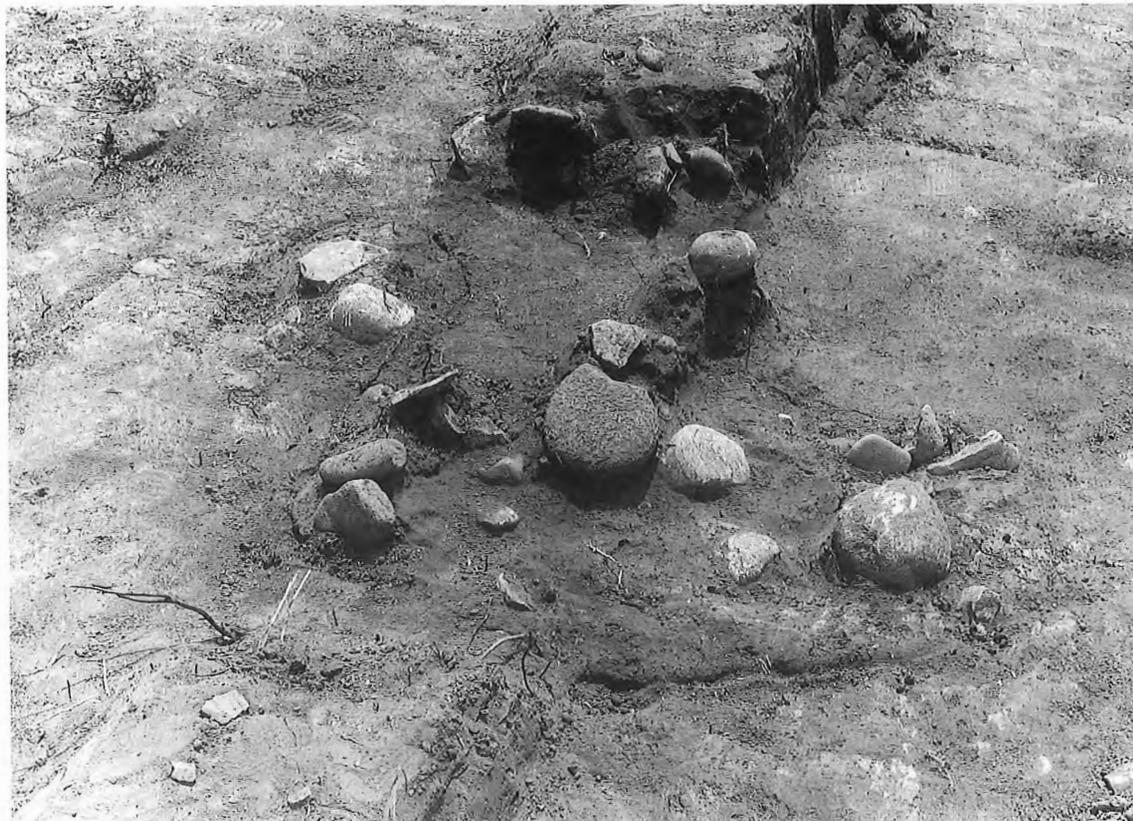


第4集石土墳



第4集石土墳（完掘時）

図版 8 遺 構【6】



第 5 集石土城

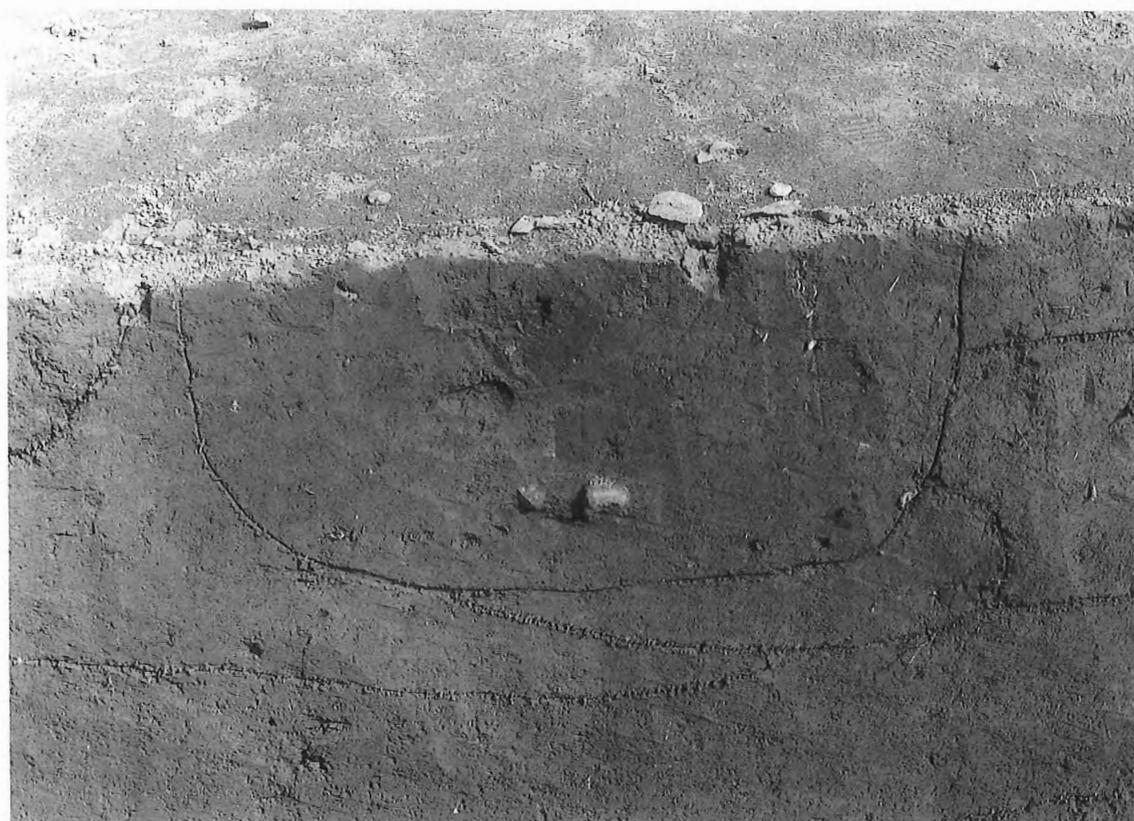


第 5 集石土城 (完掘時)

図版9 遺構【7】



第6集石土塙



第6集石土塙（完掘時）

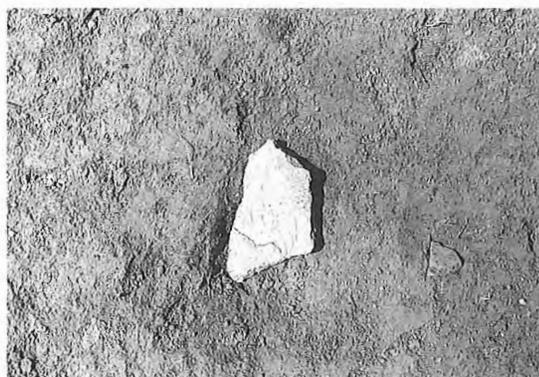
図版10 遺物の出土状態【1】



縄文土器〔早期〕(A-1区)



縄文土器〔早期〕(A-2区)



縄文土器〔早期〕(A-1区)



縄文土器〔前期〕(B-2区)



縄文土器〔前期〕(B-2区)



縄文土器〔前期〕(B-2区)



縄文土器〔前期〕(B-2区)



縄文土器〔前期〕(A-2区)

図版11 遺物の出土状態【2】



尖頭器状石器 (A-1区)



剝片 (A-1区)



礫器 (B-1区)



打製石斧 (B-1区)



削器 (B-2区)



石匙 (B-2区)



石匙 (A-2区)



石匙 (B-2区)

図版12 遺物の出土状態【3】



石 錘 (A-2区)



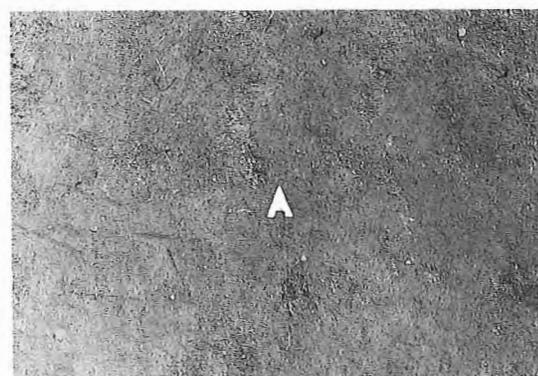
石 錘 (B-1区)



石 錘 (B-1区)



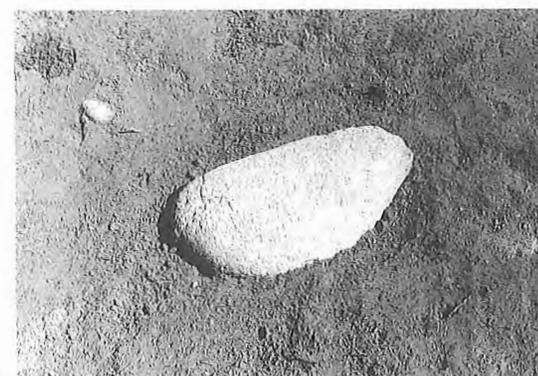
石 錘 (B-2区)



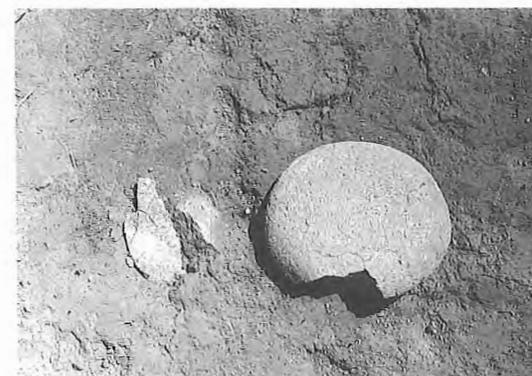
石 錘 (B-2区)



磨 石 (B-1区)



棒状磨石 (A-2区)



石 皿 (B-2区)